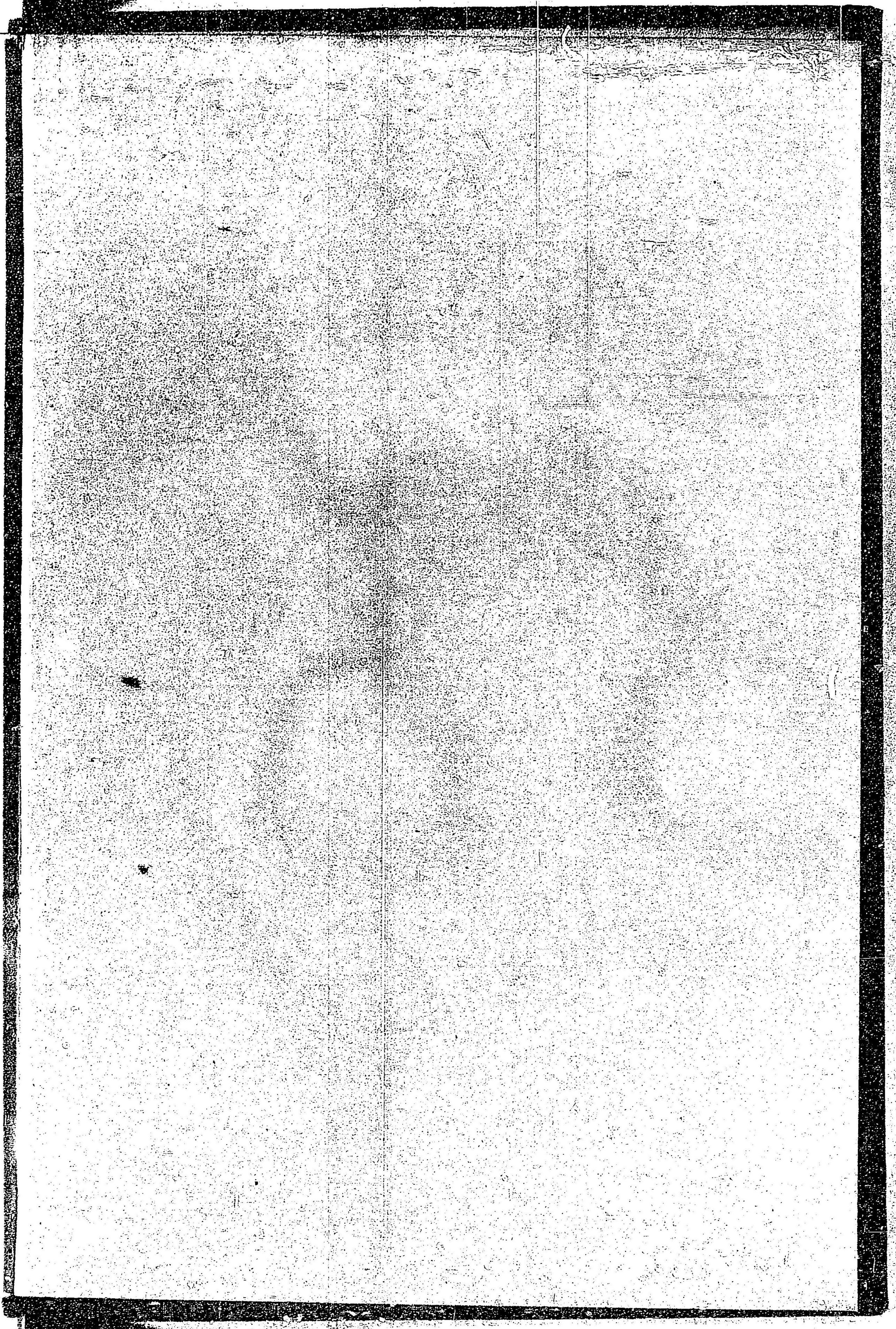
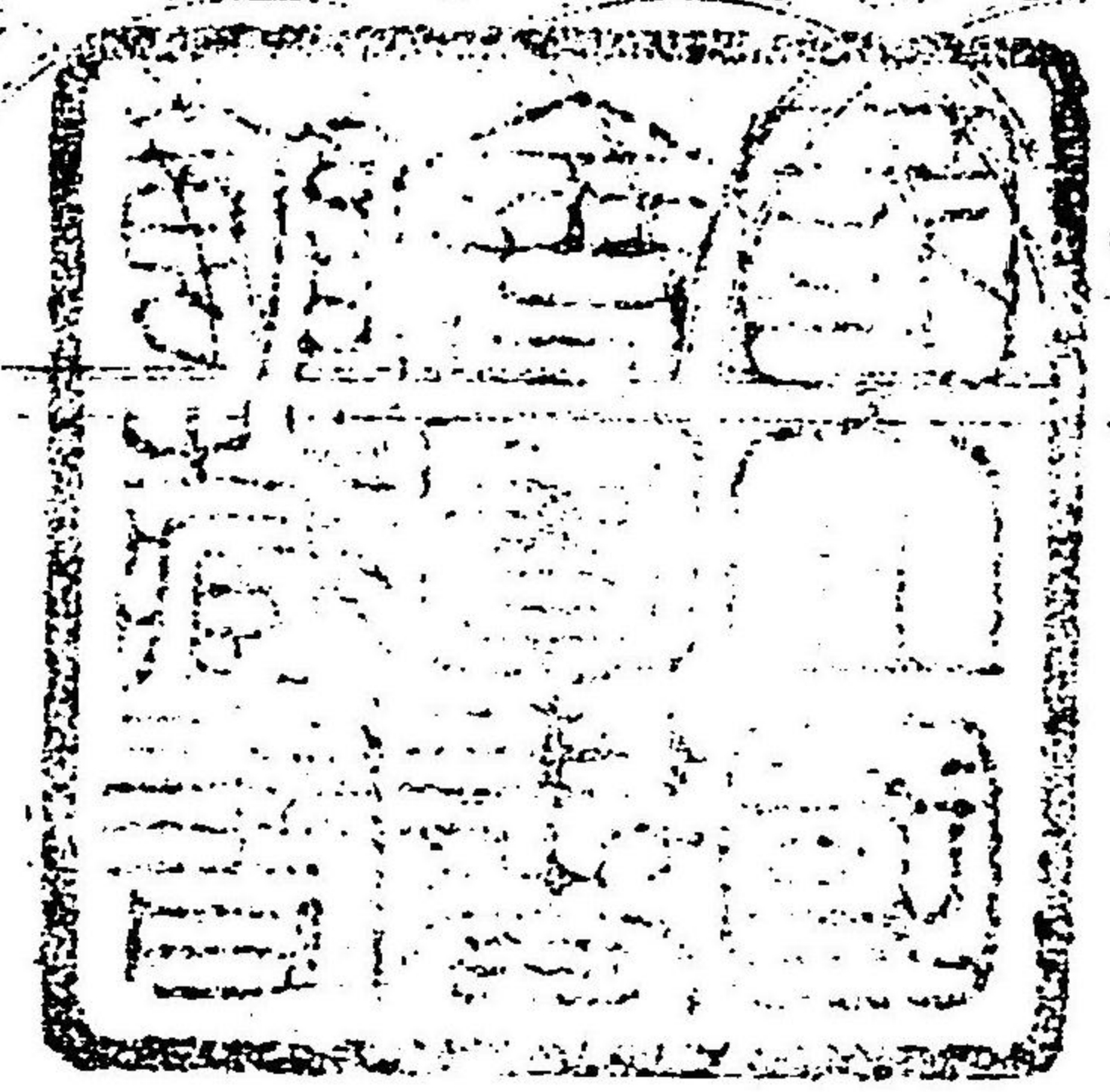


貨殖百物語

谷孫六著

春秋社版





1916

はしがき

「どうです近頃は……」

「不景氣ですな」

「儲かりませんか」

「とんでもない話です。手を出せば損をするに定まつて居ますもの……」

「それでは貯金の方ですな……」

「へッへッへッへ……」

「信託の方ですか」

「いや貯金の方です」

「大分貯まりましたか」

「可なりになりましたよ」

はしがき

「それは何よりですな、如何ですこの不景氣を利用して何かお始めになつては……」

「さあ、考へて居るのですがね」

「どんなことが宜いでせうな」

「いろいろありますよ」

「一つ教へて下さいませんか」

「とんでもない話、教へることは私の貯金を下げることです」

「……？」

「さうぢやありませんか、私の貯金は郵便局や銀行に預けてあるのではありませんから……」

「一體どこにあるのです」

「頭の中にです」

「頭の中……？」

「はッはッはッは、分りませんか、私の貯金と云ふのは、成功した人のコツや秘訣を聞いて歩くことです、そしてその一つ一つを頭の中へ収めて置くのです」

「なるほど、現金ぢやないのですな」

「現金ではないが何時でも現金になるものです」

「どうしてです」

「其通りにやれば良いことなのですから現金も同様です」

「なるほど……」

「どうです、みんな貸して上げませうか」

「是非お願ひしたいですな」

「それではこの本を御覧なさい此れが私の通帳です」

昭和六年七月

谷 孫 六

目次

神史篇

捨るものから築上げた大身代 一
暮の餅をつかぬ大金持の家憲 二
借金を種に大身代を取戻す 六
下男の智慧で世に出た名醫 一〇
人の話から掘出した大金儲け 一三
甘く當てた不景氣切抜け策 一八
こんな所にもある金儲けの穴 二五
目に觸れるものみな黄金の花 二八
身代を作り上げるコツは之れ 三三
大分限者となる心掛けは之れ 三五

黄金を掘り出す呼吸は之れ！……………三六
 道端にも轉つてる大金儲け！……………四三
 神様の金を運轉した利巧者……………四九
 こぼれ米へ目をつけて大分限者……………五五
 窮すれば通ずる火燵松の賣出……………六二
 立聞きから商賣を工夫した話……………六九
 乞食の話から思ひ着いた商賣……………七六
 工夫一つで大金儲けした九助……………八三
 何處にもある草の實と金儲け……………九〇
 庭の隅で見つけた金のなる木……………九七
 負うた子が大金儲けを教へる……………一〇四
 鱒が鱒を生む金が金を産む……………一一一
 金蔓を探し當てたトマト成金……………一二八
 一寸考へただけで取附いた男……………一三五

自分に嘘をつかぬ心懸で成功……………一六六
 古雑誌の中から百萬兩拾つた男……………一七三
 國家を考へるのが成功の秘訣……………一八〇
 大震災の中で考へた大金儲け……………一八七
 紀文の夢を實現させた幸せ者……………一九四
 忤の心を鍛へ上げる親ごころ……………二〇一
 大三井も元は斯慶ことから……………二〇八
 一つ先へ目をつけて大成功……………二一五
 腕一本脛一本が唯一つの資本……………二二二
 轉身の妙を得た大成金のコツ……………二二九

巻 談 篇……………二三

場所へ全身を打込んだ成功者……………二四〇
 人の人氣を一寸借りた氣轉者……………二四七

七轉び八起きの型を行つた男……………二六

五年で一萬圓の金を作つた男……………二三

儲けを考へないで儲けるコツ……………三五

倦まず撓まず文字通りの男……………三七

後から出て老舗並になつた男……………四一

賣りたがらぬ呼吸が賣る呼吸……………四四

顧客の氣持を店則として成功……………四七

掛値賣りから正札賣への決心……………五〇

金を借り集めるコツの大名入……………五二

十七圓の資本から稼ぎ出した男……………五五

英語を狙つて成功した大商人……………五九

成功の事實を見せた快青年……………六二

米國から仕事を探して來た男……………六六

金的篇……………

儲けるコツは目のつけ所一つ……………七二

退屈に氣がついて身を躲す……………七五

五十三歳から奮起して大成功……………七九

字引の中から出世の蔓を探す……………八二

死んだ氣になつて盛り返す……………八五

努力の安賣りに着眼した青年……………八九

知遇に感激する一點張りで成功……………九二

機會を掴んで力一ぱいに働く……………九六

親孝行の一念で成功を収める……………九九

病弱が身の幸になつた話……………一〇一

コンミッションを公開した人……………一〇六

頭で足りねば身體で補ふ方針……………一一三

破産に瀕した會社を起した人……………二二三
何でも手帳へつけて置く人……………二二六

泰西篇……………二二〇

不可能な事許り狙つて成功……………二二〇
始終馳け足で前進する努力家……………二二四
電報で就職を頼み込んだ青年……………二二九
學校へ行かなかつた許りで成功……………二三三
變り種の苗を作つては賣出す……………二三六
戀と名と金に成功した盲人……………二四四
いや應なしに錫王となつた男……………二四七
死の宣告から起つて百萬長者……………二四九
一〇〇パーセントの販賣部長……………二五二
サービス一點張で成功した男……………二五五

立話から百萬弗を儲けた男……………二五八
廢れ物を買つて巨額の儲け……………二六二
流行に目を着けて儲けた青年……………二六四
出來さうもないことをした男……………二六八
終業の汽笛を鳴らさない工場……………二七一
順々に土地を拵へて行く男……………二七七
フォードに一泡吹かした男……………二八二
獄中に呻吟しながら考へた男……………二八五
クイヤの職工だけで出來た町……………二八八
潰れさうな會社を起して歩く……………二九二
榮養劑で大儲けをしたお醫者……………二九五
銀行の給仕から北歐の石油王……………二九九
發明の價值を知つたクラーク……………三〇一
新しい就職戰術で行つた男……………三〇六

夢を實現させた放浪兒の努力……………三〇九

金に見放されて破産を免れる……………三二五

人の爲めに働き通した成功者……………三三〇

案外楽な苦勞なしの金儲け法……………三三七

名譽以上富以上の大道を歩む……………三三二

一躍世界の大船主となつた男……………三三六

世界一の土地建物ブローカー……………三四六

言葉の魔法使シュワップ氏……………三五二

お客に教はりながら大を爲す……………三五五

需要者のメドを狙つて大成功……………三六〇

婦人趣味へ嵌り込んで成功……………三六〇

人の利己主義へ附入る秘訣は……………三六二

人の我儘を利用して儲けた男……………三六五

二十六で會計監査部長のアリン……………三六八

三十前に百萬長者デイモック……………三七〇

馬鹿扱にされて喜んだ販賣部長……………三七三

ナンセンスで就職戦に勝つた男……………三七四

貨殖百物語

稗史篇

谷 孫 六

貨殖の途は八方に通じてゐる。人さまさまな心の持ち様で、どうでも行かれる寶の山である、歸するところは正直と努力の二つであるが、人間にはそれぞれの持味がある。此人にして此事ありとするも、彼の人にして此事ありとは云はれない。取るもよし、取らぬもよし、古往今來、多くの成功者がなした貨殖術を、古史に、巷談に、見聞の中から手當り次第記してみよう。

捨てるものから築上げた大身代

むかし、大津に市助といふ薪賣りが居た。親譲りの貧乏暮しで、毎日薪を荷つて京都へ出ては若干かの金に替へ、細々と暮してゐた。

市助はいつも自分の貧乏を嘆いてゐた。

「世の中は一も金だ、二も金だ、金さへあれば何塵立派な人にでもなれるのだ」

と、一日として、一刻として金儲けのことを考へないことはなかつた。それだけ稼業にも精出して、人の二倍も三倍もの働きをした。一方、日々の生活費を切詰め、残の儲けを貯蓄した。かくて五年間、僅かづつでも貯めた金が二百七十匁になつたので、これを自分の家に仕舞つて置くのも無駄だと思ひ、土地の分限者、河合又七といふ人に預けることにした。

「まことに僅少で御面倒でございますが、私が今日迄貯めました銀子二百七十匁、何とぞお預りを願へますまいか」

彼は恐る恐る申出た。すると又七は何思つたか庭へ飛降り、市助の手を取つて、無理やりに座敷へ引上げて、

「さてさて其方は感心な男だ。近頃は相當身分のある者でも、其時々仕拂さへもできぬやうな世智辛い世の中に、失禮だが多寡が薪賣りの分際で、是ほどの儲け溜めをするといふのは見上げたものだ、銀子は儘に預かつた。年に一割の利息をつけるぞ」

と、市助を賞揚し、また激励し、彼自身で預り證文を認め、印形を据ゑて彼へ渡した。市助は其夜家へ歸つて、例の證文をつくづく眺めながら考へた。

「この勘定で行くと、百匁溜まつた時に預けたら、この一年に十匁の利息がついてゐたのだな、残念なことをした。これからは百匁毎に預かつて貰ふことにしよう」

彼の頭には貨殖の芽がジリジリと吹き出して來たのだ。

「それでも今年からは俺の他に二十七匁の利息といふものが儲け溜めてくれる、有難いな、俺はそれに負けずに働かなければならない」

それが一つの勵みとなつた市助は、今迄よりは一層精出して働いた。

ある日、彼は京都の得意先である三利といふ家へ薪を持つて行つた。この家は諸國大名の御用金を承る有名な長者で、一家は主人夫妻を初め、奉公人を加へて三十七人といふ大世帯であつた。家も大名屋敷のやうな廣大なもの、一家の調度衣類の綺羅美やかさは、市助の目にどれもこれも驚の種であつた。

「俺もいまにこんなになるぞ」

彼は裏の納屋へ薪を積込みながら、こんなことを考へてゐたが、ふと此家の下男が出て来て、側の掃溜へ、燭臺や提灯に流れついた蠟を捨てようとした。

「おつと、一寸待つてくれ、捨てるんならその蠟を俺にくれ、その代り燭臺や提灯は俺が掃除してやる」

彼は下男からその蠟を貰ひ受けて大津へ戻りがけ、京極の蠟燭屋へ立寄り、

「これを幾らで買つてくれますか」

と、例の蠟を出して見せた。

「三百七十文で頂きますせう」

手代は直ぐに値をつけた。市助は手を振つて、

「冗談云つちや不可ません、生蠟ですよ、幾ら安く踏んだつて五百文がものはあります」

と、強く出た。結局相方歩み寄つて四百三十五文に賣つた。

「よしよし、これで俺はあの證文より稼いだ譯だ、うまいぞ……だが一寸待つて、之れは俺が稼いだのでなくて蠟が稼いだのだ。この蠟に負けたら、俺は掃溜へ捨てるものより働かないといふ事になる、さあ、大變だ、俺は蠟以上に稼がなければならぬぞ」

彼の貨殖觀念は、儲けた金に負けまいとする自分の鞭撻に在つた。古繩を貰つて十文の金でできれば繩に負けまいと發奮し、こぼれた米を拾ひ集めてはこれを金に換算し、その米に負けまいと努力する。

斯くて河合への預け銀が二十七貫にもなつた。二代目の河合が金銀を湯水のやうに蕩盡して、さしもの大分限者も分散の憂目をみるやうになつた時、市助は其預け銀で河合の屋敷を買取り、薪と米との大商賣を始めた。それだけの分限者になつても市助夫婦は、昔の貧乏暮しを忘れず、人には誇らず、行ひを堅くし、あるが上にもよく稼業に精進するので身代は伸びる一方、當時の

商人の鑑として謳はれるやうになつた。

暮の餅をつかぬ大金持の家憲

「俺が貸家住居をして居るといふ事實はこの借家証文が證明する」

と云つて、何時も貸家住居を自慢にしてゐる藤市といふ男が、京の室町蔦屋長左衛門の貸家に住んでゐた。

「借家住居で千貫目といふ現金を持つてゐる男は、廣い世間で俺一人だらう」

彼はいつもこんなことを云つて自慢して居た。ところが、たうとう其自慢ができなくなる日が來てしまつた。

と云ふのはこの藤市が烏丸通りに三十八貫目の貸金の抵當に宛てて置いた家があつたが、これの利息が滞つて、たうとう質流れとなつてしまつたからだつた。彼は人並みに家持ちになつてしまつたので、貸家住ひの財産家と云つて威張つて居たものの、家持となつたからには、京には

もつともつと豪い富豪も居ることとて、この藤市などは、まるで塵芥位にしか思はれないのであつた。

しかし、斯ういふ面白い男であるだけに、藤市にはいろいろな話がある。

この男は稼業をする傍ら、反古で帳面を拵へて置いて、自分が店に居る間、その帳面から筆を離さず、いつも、しきりと何か書きつけてゐるといふ風の男だつた。何をそんなに帳面へつけてゐるのかといふと、兩替屋の手代が、店の前を通ると、錢や小判の相場を聞いては書きつけて置く、米屋の番頭が通れば、米相場を訊ねて之を記して置くといふ風である。呉服屋の若いものは、長崎商賣の様子を尋ね、繰綿とか鹽、酒などは江戸の出店などから來る飛脚の到着日を見合せては之を問合はす、といふやうに、恰度新聞の經濟欄を一人受持つてゐるやうなことをしてゐた。こんなことが町中に知れ渡ると、

「あそこへ行つて聞けば何でも判る」

といふので、京都中の人人は重寶がつていろいろなことを訊きに行く。従つて人の出入りが多くなる。つまり店はいつでも大繁昌だつた。

さうして、この藤市の平常の身持ち振りはどうなかと云ふと、素肌すはだに單襦袢ひとじゆばんを着、その上に綿わたを三百目もも入れた大布子おほのこを一枚まい着たつきりで、外ほかには何なんにも身に纏まとはない。昔むかし上方かみかたで流行はやりした袖そで覆輪ふくりんといふ便利な經濟けいぎ的な上衣うはぎがあつたが、これはこの藤市とういちが考案かうあんしたものださうである。

一生いしょうのうちうちに絹物きぬものといつては薄藍色うすあゐいろの袖そでを一枚まい持つて居ゐるきりだつた。こんな風ふうだから萬事ばんじに無駄むだといふものが無く、町内ちやうないの葬式さうしきなどには是非ぜひなく會葬くわいさうするやうなものの、歸かへりは路傍みちばたの草くさなどをむしつて。

「これは現げんの證據しやうこといふ草くさだ、蔭干かげぼしにして置おくと下痢腹痛げりふくつうの時ときによい」

などと、どんな場合ばいばいでも物を役やくに立たてようといふ考かんがへを持つてゐた。であればこそ、大した商た賣うでも無いのに斯かうして一代いちだいのうちうちに金持かねもちと云いはれるほどになつたのだが、彼かれの貨殖哲學くわしよくてつがくには、可かなり學まなぶべき點てんが少すくくない。彼かれは身代しんだいを作る迄きに、まだ一度いちども自分じぶんの家うちで暮くれの餅もちを搗ついたことがない。

「暮くれの忙いそがしい時ときに餅搗もちつきなんて餘計よけいな暇ひま入りだ、第一だいだとか杵きねだとか、蒸籠せいろうだとか、一年いねんに一度いちどだけのものに餘計よけいな道具どうぐが要いる、そんな馬鹿ばかげたことをするよりも、餅屋もちやから買かへば、手てつけ

ずに濟たすむぢやないか」

と云いふのだつた。ある年としのこと、暮くれの二十八日にじゅうはちにちに餅屋もちやの若わかい衆しゆうが搗つき立たての餅もちを持つて來きて、

「毎まい度ど有難ありがたうございます、御註文ごちゆうもんの餅もちを持つて參まりました、お調しらべ下くださいまし」

と云いふのだつたが、藤市とういちは聞きえないふりをして何か頻しきりと算盤そろばんを弾はじいてゐる。餅屋もちやは暮くれの忙いそがしい最中さいちゆうなので、

「お速はやくお受取うけとり下くださいまし、また五六軒廻けんまはるところがあるんですから」

と急せき立たてる。藤市とういちは相變あひかはらず返事へんじをしない。すると店みせの若わかいものが氣きを利きかしたつもりで目方めかたを聞きいてから、之これを秤はかりにかけ、ちやんと量目はかりめを合あはせて請取うけとつて置おいた。

ところがそれから二時間じかんあまりしてから藤市とういちが、

「いまの餅もちは？」と云いふので「請取うけとつて置おきました」と答こたへると、

「お前は馬鹿ばかだ、この家うちへ奉公ほうこうに來きる程ほどの者ものとは思おもへない。氣きが利きかないにも程ほどがある。餅もちは一い時ときも置おけば冷めさるもの、冷めされば水分すいぶんが無なくなるから目方めかたが減へる、お前は温ぬくもりのある水氣みづけへ無な駄だな金かねを支拂しはらつたも同然どうぜんだ、以後いごは氣きをつけなさい」

と云ふので、店の者が目方をかけて見ると、成るほど最前とは大變な相違だったので、今更ながら藤市の細心に驚いたとのことである。

借金を種に大身代を取戻す

むかし奈良の町に晒布問屋で松屋某といふ商人があつた。この人は仲々の資産家だつたと見えて、何から何まで至つて氣樂に振舞ひ、一寸一杯やるにしても、着には珍らしい鱧の刺身といった風のを好むといった風で、随分と豪華な生活をして來たものだつたが、五十幾つかでポツクリと死んでしまつた。

いつたい人の身代などといふものは、死んで見なければ判らないもので、可なりな財産だと噂の高かつたこの松屋の店も、主人が死んで見ると、後に残つたのは夥しい借金だけだつた。

残された未亡人は、年頃三十七八だつたが、人一倍美しい方だつたので、誰の目にも廿七八にしか見えなかつた。だから夫が此世を去つた以上は四十九日でも経つたら再婚するだらうと思は

れてゐたところが、年若な子供もあることだからといふ理由で、黒髪を惜しげもなく切り落し、白粉氣もなく萬事地味好みで暮すやうにしてゐるのだつた。

しかし如何に地味だからといつて女は女、鉞を取つて働くといふ譯には行かず、さうかうするうらに、家も古くなつて來る、壁の繕ひや根柢ぎまで自分の手一つでやつてのねばならぬとなると可なり骨が折れた。そればかりではない。亡き夫が残して行つた借金の仕末をどうするか、彼女の明け暮れは、それ許りに追ひつめられてゐた。彼女はたうとうやり切れなくなつて、ある日債權者一同を集め、

「私も、いつまで斯うしてゐては身の破滅ですし、それに皆様に對しても申譯がありませんからこの住居を皆様の手にお渡し致したいと思ひます。もし皆様でお分配することができないなら、焼いて灰にしてかますでなりとお分け下さいまし」

と、申入れたのであつた。それは全く彼女の云ふ通りで、多額な負債を償ふには餘りにボロボロな家であつた。だから彼女の云ふ通り處分したからとて債權者側の利益になるといふ譯ではない。また、さうまでして此一家に立退いて貰つたのでは如何にも氣の毒だ、といふ氣もする。

「まあまあ、さう云はずに、暫くここにお住ひなさい、私共の方の貸だとして、今直ぐ返して頂かねばならぬものでもありませんから……」

と、云ふものをへ有つた。しかし未亡人は何か考へてゐることがあると見えて、いとしをらしい調子で、

「それでは却つて私の方が痛み入ります、何とかして幾らでも御迷惑を少くしたいと思つて居りますので、もしこのお願ひが聞かれなかつたら、町内の方に歎願して、此の家を頼母子講の入れ札にして賣ることも考へてをりましたのです」

と、切り出した。一同は思ひつきだといふやうな顔をして、

「頼母子講つて一たいどうするのです」

と訊き返した。彼女の説明に依ると、誰からでも一本につき四匁の金を受取つて札を賣り、後は抽籤で當つた番號の札の持主に、其家を渡すといふやり方のものであつた。

「なるほどそれは面白い。損をしたつてたつた四匁のことだ、うまく當つて見ればこの家が貰へるのだ、ままよ一つやつてみる」

といふやうな氣持が一同の頭に浮んで來た。

「それでは一つやつてみませう」

と、一同は別れたが町中では大評判、我も我もと四匁づつ出して頼母子講の札を買ふので、遂に三千本の札が賣切れとなつた。三千本と云へば銀十二貫目に當る、借金は五貫目ほどだつたから、差引しても七貫目の銀が残る。

未亡人はこの七貫目を資本にして、更に晒布問屋を始めた。それが繁昌して主人の時より一層大きな商人になつたと云ふ。それにしても、あの頼母子講のたつた四匁で未亡人の家屋敷を手に入れた仕合せ者は誰だつたかと云ふと、その家に召使はれてゐた女中だつたと云ふのだから世の中は不思議なものだ。

下男の智慧で世に出た名醫

眞那道三は近代の名醫であつた。

また、その名前が廣く知られてゐない頃、彼は京都へ出て醫者を開業したが、誰一人診察を受けに来るものは無かつた。

「田舎の藪醫者奴、都の真ん中へ出て開業するなんて大膽過ぎる」

と、蔭で嘲笑するものさへあつた。大した貯蓄も無い彼は、一人の患者も來ないのに、いつ迄も世帯を張りつづけて行くことはできなかつた。

「残念だが、未だ時節が來ないのだ」

と諦めて、家財道具を二束三文に賣り飛ばし、漸と旅費だけ作つて田舎へ引込んだ。

醫者としての彼は事實立派な手腕を有つてゐた。これだけの手腕を持つてゐて、草深い田舎で老朽ちて行くことは、彼に取つて何よりも悲しいことであつた。

——と思ふと矢も楯も堪らなくなり、

「もう一度京都へ出よう」

と、決心した。彼は少し許りの田畑を抵當にして、再び京都へ出たのだが、それも失敗に終つた。

「矢張り時節が來ないのだ」

彼はその儘故郷へ歸つたが、どうしても京都が思ひ切れなかつた。彼は三度上京を決心した。けれども、情ないことにはそれも失敗だつた。

「どうしても俺は駄目なんだ」

彼は慚然として田舎の薄暗い家の中で嘆息を洩らした。これを毎日のやうに見て居る召使の八助は、この頃の道三の悄然加減を見ると、たまらなくなつてしまつた。

「何とかして内の旦那様を世に出して上げたいな」

と、こればかりを考へつづけた。そして夫れには矢張り都へ出なくては駄目だつた。

「旦那さま、今一度京へ上つて開業なすつたら如何でせう」

と、道三にすすめた。すると道三は、

「いや、俺はもう諦めた、三度上つてあの失敗、もう精も根も盡きはてた」

「旦那様、前の三回は未だ時節が來なかつたのです。それに不可かつたら田舎へ引込む——といふ逃げ足がついてゐるから駄目だつたのです、今度こそは京都の土になるといふお考へで御決心

なすつたら如何です」

八助は何か期するものがあるやうな緊張した顔つきで薦めるのであつた。

道三とても口では諦めたと言ふものの、腹の中は無念で堪らなかつた。俺ほどの腕を持つて田舎で燻ぶれて了ふのは……と絶えず抑へ難い覇氣が胸の中で渦巻いてゐたのである。彼は八助の言葉に決然とした。

「さうだ、京都の土になる考へで行かう、背水の陣だ、今から行かう」
斯う決まつて見ると、彼は矢も楯もたまらなくなつて、其夜のうちに京都へ行く仕度に取りかつた。

八助は我がことのやうに喜んで旅の仕度を急いだ。道三は四度目の京上り、三條下ル堀川の西に居を構へた。細竹の打附け格子、宿札も八助に一切任せて格子には「はくらんぐすり」といふ看板まで出した。

「八助、看板のはくらんは可笑しいな、あれは霍亂と直さなくては……?」
道三は朗らかな心地で笑ひながら八助に斯う云つた。

「へい、御尤もでございますが、まあ、あれも一つの方便でございます」

八助も朗かに笑つて答へた。

土地は邊鄙であり、それに田舎出の名も知れない醫者、例に依つて一人の患者さへ來ない。道三は覺悟してゐたものの、矢張り淋しい心持でならなかつた。

八助は毎日京都の町中へ出かけて行つた。彼は今度の上京に就ては自分に充分な責任を感じてゐる。即ち東奔西走してゐるのである。それでも一向に患者らしいものは見えなかつた。

ある日、道三は玄關先に腰を下ろして、庭木の蜘蛛の巣を見てゐた。

「あの蜘蛛も暇なんだな、蠅一疋かかつて居ない、丁度俺と似てゐるな」

こんなことを考へながら少し捨鉢になつてゐた。そこへ、ひよつこりと一人の患者が現れた。

「眞那道三先生はこちらでございますか」

「はい、手前が道三で……」

「少々診て頂きたいのでございますが……」

初めて來た患者である。彼は丁重に診てやつた。また一人來た、また一人來た。こんな按配で

どんな風の吹き廻しか、毎日二人三人づつ来るやうになつた。

「旦那さま、如何でございます、はくらのくすりは利きましたでせう」

八助は上り框へ腰を下ろして一服吸ひつけた。といふのは、毎日々々京都の町へ出た八助が、そばや、床屋といふやうな所へ行つては、

「この邊に眞那道三といふ名醫が居るさうですが、どちらでございませう。何でも「はくらんぐすり」といふ看板が出てゐる家たさうですが……」

と訊ねて歩いたのだ。でさうでなくとも一寸をかしいはくらんぐすりである、何時とはなしに目覚えになつてゐたと見えて聞く人ごとに教へてくれる、八助は次から次へと訊ねて歩く、彼は見事な宣傳術を應用して歩いたのである。

三度失敗して四度目に成功した道三は八助の宣傳に依つて、其眞價を認められたのであつた。

人の話から掘出した大金儲け

作州津山の商人岡屋は、けふも一日あてどなく大阪市中を歩き廻り、疲れた足を引すりながら浮世小路の宿へ戻つて來た。

大阪へ上つてからもう一ヶ月にもなる。何がな手つ取り早く大金を儲けて、今一度津山で旗擧げして、過ぎし日の分散の不名譽を取返したいと焦燥するものさう容易く大金儲けの途は見つからなかつた。

彼は夕方、まだ燈火の點かない小座敷へゴロリと横になつて、煙草を吸ひながら、これから先の事などを、いろいろと考へて涙ぐましい心になるのであつた。

隣座敷にはあかあかと燈火が點いてゐた。ふと聞耳をたてると、若い男女の話聲がかすかに漏れて來る。岡屋は不機嫌に、一つ吐月峯を強く叩いて僅かに癩癩を抑へた。

「今度はウント儲かる見込みだ。さうしたら、お前の借金も綺麗に拂つて江戸へ連れて行くから……」

と、男の聲である。

「そりあ本當！ 嬉しい」

と、女の聲である。

彼は、女が男にしなだれかかつてゐるだらう場面を想像しながら一段と苦りきつた。
「どうして其處に儲かるの？」

岡屋はハツと緊張した。そして全身を耳にして男の返事を聞き漏すまいとした。男女の痴話は癩の種だが「儲かる話」は何一つ聞き逃すまいと思つた。

「ウム、今度お江戸では將軍家にお悦びごとが續くので、諸大名衆よりの獻上品に澤山の巻絹が入用なのだ。俺のうちの主人は仔細あつてこんなことが人一倍早く耳へ入るので、俺に吩咐けて京、大阪へウンと巻絹を買占めにやる譯さ」

男は得意さうに大聲で喋つて女を喜ばせてゐた。

岡屋の血は全身に沸き返つた。と、彼はガバと跳ね起きて慌たしく旅の仕度を整へた。

「よし、俺の出世の辻占だ、ひとつ買ひ込んでやらう」

彼の懐中には分散當時、津山の全債權者から惠まれた涙金の三百兩がある。彼は其の夜のうちに京都へ行き、持金三百兩全部を投げ出して巻絹を買込んだ。と直ぐ大阪へ引返し、その巻絹を

入質して二百兩をつくり、その二百兩で買込んだ巻絹を、復質入れして百五十兩をつくり、百五十兩の巻絹を百兩に入質し、更に百兩で買つて七十兩に入質し、七十兩で買つて五十兩に質置き五十兩のを三十兩に質置き、三十兩で巻絹を買つて廿兩質に入れて、結局三百兩の元金で九百二十兩の巻絹を買込んだ。流石は商人、ことに北濱にゐる金銀のいそがしい遣繰りを見聞してゐただけに、三倍餘りに生かして使つたところは大手柄であつた。

彼は凝乎と機會を待つてゐた。そして江戸の商人の話が事實であれかしと祈つてゐた。

「あの話が出鱈目だつたら何うしよう」

かうした不安の念にも襲はれた。

「思惑が當れば俺も芽を吹んだが……」

彼はまさに乾坤一擲の離れ業を打たうとしてゐるのである。運命の骰子がどちらへ轉ぶか、彼は落つきのない數目を送つた。

——と、彼に大なる歡喜の日が來た。江戸のお祝ひごとが世間の噂にのるやうになり、巻絹の相場が日一日と上向いた。到るところ品拂底を告げた。彼は、ここぞとばかり一擲に持荷全部を

賣拂つた。その賣値三千二百七十兩、まさに元金の約十一倍である。

彼は初めて一人前の商人になつたやうな心地がした。そして不思議に、

「商機を捉へること、金を生かして使ふこと」に成功した自分自身に感謝するのであつた。

そして彼は誰にもこんなことを云つて居る。

「人の話も迂濶には聞かぬことだ」と。

甘く當てた不景氣切抜け策

大阪西船場で鹽九といへば代々聞えた大きな材木商で、その身代も長者番附に漏れたことのないといふ果報もの、當主の九兵衛は店の方一切を番頭に任せきり、自分は終日風流韻事に身をやつし、茶の湯は勿論のこと、生花の會、和歌の會、連俳、十種香の源平、古筆の會など、當時雲上人の遊事に擬り、果ては「冠着ぬ公家様」と蔭口され、却つてそれを他愛もなく喜んでゐた。しかし、商人が商賣を他人に任せて、こんな不生産的な遊びに夢中になるやうでは、もう其の

家の運命は知れたもの、急坂に玉を轉ばすやうに、没落の一路を辿つた。

性來利發な九兵衛は、まだ奈落に落ちないところでハツと眼がさめた。そこで番頭を招んで、密に身上立直しの相談をした。

「……お店の人べらし、諸経費の緊縮をするより外に方法はありますまい」

兩手を拱いて長い間思案をしてゐた番頭は靜かに口を開いて自分の意見を述べた。

「さあ、そこだよ。それをやつちやあ鹽九の苦しい内懐が世間から見透かされたも同然、分散より外に途はあるまい、何とか店は此の儘で……」

彼は吻と溜息を吐いた。沈黙がつづいた。が、やがて其の沈黙を破つて、

「これこれ」と叫んだ。其の聲に吃驚した思入れの番頭に、

「俺は隠居しよう、俵九十郎の後見はお前に頼むぞ、萬事いいやうになー」

と、番頭の顔を覗きこんだ。番頭の顔には苦悶の色が讀まれた。

「それは表向き、萬事は俺が内々で指圖する、かうして風流のお交際がなくなれば、それがそつくり儲けになる譯だから……」

主人の腹が番頭に呑み込めた。それから伏見の兩替所へ銀二貫匁で小屋敷を買つて引込んだ。身代は表向き五歳になる一子九十郎へ譲つて番頭が後見役、鹽九の商賣體に何の變りもなく手廣く續けられた。

九兵衛が伏見へ隠居してからは、今まで風流韻事の交際に支出した莫大な経費が自然と浮いて來るのであつた。そればかりでなく、數ヶ所に持つて居た下屋敷も、彼が大阪にゐなくなれば空けて置くのも無駄と、これを貸家にして家賃をとりたてる。絞れば智慧も出るもの、「こりあ妙案ぢやつた」と九兵衛は獨ホクホクしてゐた。そして時折り訪ねて來る番頭に、

「どうぢや、かうして居れば、二重三重の金儲け。俺が殊更儲けなくつても自然に儲かつとるのぢや、俺の若隠居！ 孔明や楠にも此の計略はわかるまい」

と、朗かに笑つて見せた。が、偶には風流韻事の心が頭を擡げて、堪らなく懐し味に酔ふこともあるが、流石に彼は決心も堅く苦しい前車の轍をふまうともしなかつた。そして四五年のうち身代の楯をとりなほし、七年目に大阪へ戻り、改めて九十郎の後見となつて、表向き一家の采配を揮る身となつた。

「儲けるよりも費はないやうにしろー」

儲にこれも一つの處世法である。なまじ儲けることに焦燥るのは躓きがちになる。費はないやうにすることは、要するに一種の手堅い金儲けではあるまいか。

こんな所にもある金儲けの穴

郷里で食ひ詰めた男、ここばかり日が照るものかと雄々しくも江戸へ出て見たが、生馬の眼を抜くほどの人達と伍して、そこにも生活の途を探しあぐね、やむなく不面目のつらさげで播州姫路へ歸つた。

叔母さんは相變らず、涙の出る程にやさしく勧めてくれた。

「何かいい商賣があつたらおやんなさい、少し許の資本は出してあげるから」

と、いふのであつた。しかし、そのいゝ「商賣」が却々に見つからなかつた。歸郷してもう半年、七月の暑さに悩みある身は一入に辛かつた。お盆も近づいたので彼は、せめて先祖の墓參で

もして不幸のお詫をしようと思つた。

墓地には古い石塔、新しい石塔。無常の前には、年齢の差別はなかつた。彼は落魄した自分の境遇と死とを考へていつにないセンチメンタルになつた。そして其の涙ぐましい心地で先祖代々の墓を掃除し、枯れた櫛を生き生きとしたのとたてかへ、清々しい鬘を手向けて合掌した。他所の墓も櫛は枯れてゐた。鬘の中の子子が浮き沈みしてゐた。もうお盆であるからそれまでには櫛も水も、新しいのと取りかへられるであらうが、平常は佛も忘れられがちである。生きることに血みどろになつてゐる人達には、死んだ人達の世話までに手が届かないと見える。墓地には雑草が生え茂り、墓石は鳥の糞で白く汚されてゐるのも多く目についた。

「何かいゝ商賣」を探しあぐねてゐた彼は、不圖、無常感から解放されると、いつかまた「いい商賣」を見つけることを心に描いた。その刹那……礎と思ひ當つたものがあつた。

「毎月の忌日に墓掃除をして、櫛と水とを新たに取り替へたら、亡き人達も嘸、よろこぶことだらう。イヤ、施主にとつては尙更結構だと喜ぶことだらう」

——と、心に浮んだのが、やがて直ぐ「いゝ商賣」の緒口となり、かねて懇意な寺の住職を訪

ねて相談に及んだ。お寺にしては墓地が常に清められることなので、これ亦大喜びで賛成してくれた。

「それで掃除料として墓の持ち主から、毎月八錢宛を頂戴することにしたいのですが……」

と、いふと、住職は、

「いいともいいとも、早速檀家一同へ、お知らせして進んぜよう」と、少からぬ好意を寄せた。それから間もなく、墓掃除の依頼は増えた。遂にそれは、いつの間にか「いい商賣」となつた。枯れた櫛を抹香にはたかせて賣つただけでも、三人口は易々と暮して行けるだけの収入があつた。更に寺町の門際に「萬布施の包銀あり」といふ招牌を出し豫め金子百疋より白銀二兩、一兩三匁、二匁、一匁までを包んで置き、一匁について二錢づゝの包貨をとつて兩替を始めた。この新商賣が又お寺詣りの人たちに重寶だと喜ばれた。それだけ評判となり店も繁昌したので、彼は十年たたぬうちに三百貫匁の身代をつくつた。

げに人間の一生は糾へる繩の如しである。十年前に彼は、五百匁や三百匁の元手では、直ぐ暮しの立つ商賣はないと惱みぬいてゐた。「資本を貸してやらう」といふ叔母の好意も無にして「い

い商賣を探し當てたのが、結局無資本同様でできた幕掃除。それが不思議に當つて出世の門をぐるやうになつた。

彼は死んだ叔母さんの優しい味を忘れることができなかつた。十年後その墓を掃除する毎に、十年前の苦しい思ひ出に耽りながら亡き叔母を偲ぶよすがにした。

目に觸れるものみな黄金の花

長崎きつての大商人刀屋、

はかたま屋等といふ人達が何かの話の序から伊勢参宮を申合せた。

「皆さん、道中の話相手にあの増田屋を誘つて行つたら何うでせう」

と、一人がいふと、

「それは結構！」

と、一同は賛成した。

増田屋は十善寺前に、わづかの焼物商賣をしてゐる小商人であつた。夫婦かけ向ひの暮しで、

食ふには心配はなかつたが、さて幾年経つても其の日暮しの小商人、夫婦はいつも、速く立身出世をしたものだと言ひ合つてゐた。

「俺たちはお互に、櫻鯛や、もみぢ鮎の味さへ知らないんだからなあ」

夫婦のあひだに、よくこんな話まで繰返されるのであつた。しかし、増田屋の律義さと眼から鼻へ抜ける捌巧さと、其の生れ持った話術の上手さが、一度彼と話し合つたものに忘れることのできない愉快な印象を興へるのであつた。従つて彼のこの人徳が、何等取引関係もない大商人たちから誘ひを受けることとなつたのだ。

彼は、かねてより大神宮を信心してゐた。折も折、旅費も要らずに伊勢参宮ができることとて早速一同に随伴して出發した。彼には此の旅は、別に一つの意義ある商況視察でもあつた。

一行は京都に立寄つて見物した。彼も二三日の逗留に、何かな金儲けの途を見つけようと注意した。一行と通りすがりに氣づいたのは、四條通りの松屋で淡竹の皮草履を見たことであつた。それは長崎には珍らしい品であつた。

「一ツの金儲けを見つけた」

彼は心の中で叫んだ。早速松屋へかけつけて其の草履を千足買つて長崎へ廻した。新奇を好むのが人の性である。長崎の人達は、「都の人達の履くものを履く」といふ誇りが、忽ち評判となつて淡竹の皮草履は流行した。増田屋の思惑は外れず、數度京都から草履を取り寄せて賣り、わづかの間に少からぬ金儲けをした。

「これも日頃の信心のおかげだ」

彼は女房と語り合つて喜んだ。

「まだ櫻鯛や、もみぢ鮓は早いでせうね」

女房は笑ひながら彼の顔を眺めた。

「いつでも食べられると思へば、さう急に食ひたいと思はないよ」

彼は心地よささうに笑つた。

それより彼は毎年伊勢参宮をした。そして其都度京都へ上つて金儲けの途を探し求めた。

「金儲けといふやつは、探せば必ずあるんだよ」

淡竹の草履で儲けた得意さから、女房に高言を拂つた手前、彼は今度も、金儲けのお土産を持つて歸らねばならぬと思つた。そして京都で珍しい品を探した。

「布袋屋のかるた」「御影堂の扇」「寺町の青貝細工」何れも彼の目にも珍らしいものであつた、直ぐに長崎へ廻した。案の定、それが珍重されて巨利を博した。斯くて數年ならずして増田屋は長崎屈指の大商人として數へられるやうになつた。

食へる身分になつても、食はない心掛け。人の好奇心を利用する商才。それは餘りに讀み古した言葉であるが、さて人には油斷のあるもの、茫然に成功したといふ人は少いものである。金儲けの手段も方法も、それこそ探せば手近にある。足許から飛ぶ鳥に驚かされるのも謂はば其人の油斷からではあるまいか。

身代を作り上げるコツは之れ

一條通りの鮫屋は、流石に京都でも、大商人として聞えた人だけに、その平素の心掛けは「な

るほど」と、人を敬服せしめるものがある。

「何でも拵へようと思つたら、思つた日から五年間辛抱するんだね、すると五年後には其経費の利子だけでこしらへられるやうになるから、謂はば只でできることになる」

と云ふのである。なるほど、鮫屋の主人の云ふことに間違はない、ただ五年間辛抱ができるかできないか、そこが其人の運命の岐路である。辛抱のできる人だけは貨殖の道に叶ふ人で、鮫屋は何ごとにも此五年主義を取つて来る。所謂理想實行主義である。

であればこそ、一代に何千貫と云ふ身代をこしらへた。別に偶然な機會から大金持となつたのではない。

「物を賣る方に秤や物差があつて、買ふ方になのは片手落だ、臺所には必ず秤と拵を備へて置くやうに……」

これが鮫屋の主張である。

「米櫃は二斗入れのものを作るんだ、二斗きつかりの米櫃にするのだよ、それより大きくても不可い、小さくても不可い。さうすれば米屋が持つて来て其儘入れても拵から拵へ移すのと同様だ」

から、先方で誤魔化すことができないんだ」

「ところで、こんなところへお茶碗を入れて置くのはどういふ譯ですか」

「それか、それは其處まで米が減つて行つたら、あとの米を注文するやうに注意するんだ、全然無くなつてから注文すると、どんな急用があつても使をやらねばならぬ。それだけこつちの手間が缺ける。それは單に米櫃ばかりではない、凡て物事といふものは、底へ突き當らない手前で用心することが第一だ」

と、鮫屋の主人は飽迄細かいものである。

ある日、鮫屋の臺所へ鹽辛屋が来た。

「今日は素的減法旨い鹽辛があるです、一合買つて下さいませんか」

「よし、買つてやる、時に一合幾らだい」

「へえ、五文でよろしうございます」

「ほう、これは又安いことだ、しかし一合は一合でも、拵が違ふんぢやないか」

「とんでもない話、こちら様には臺所に、はかりも拵もちやんと用意しておありださうですから」

「こちらの櫛でおはかり致しませう」

鹽辛屋も抜け目がない。鮫屋の臺所をよく知つてゐる。鮫屋は考へた。

「よし、それでは買はう。しかし一合は多過ぎる。この小皿へ一杯二文で賣つてくれ」

と、鼠入らずから小皿を一枚出した。見ると如何にも小さい皿である。これで量れば三杯一合見當らしく見える。鹽辛屋は内心よるこんで二つ返事に承知をした。

「いや、結構々々、序にもう一杯買つて置かうか」

鮫屋は頗る機嫌がよい、小皿の鹽辛を別の器へ入れてもう一杯買つた。鹽辛屋は幾度も幾度も禮を云つて歸つた。

其後で鮫屋は、笑ひながら、

「あの鹽辛屋奴、俺のうちに櫛のあることを知つてゐるものだから、鹽辛へ水を殖して來やがつた。だから俺は小皿で買つてやつたんだよ、小皿なら實ばかり載つて水は滾れてしまふからね」と、召使のもの達に例の鹽辛を見せた。

萬事がこのコツである。だから一代に巨萬の富を造り上げ、

「俺の身代は儲けようと考へて儲けたものよりも、損をしまいと考へて萬事に氣をつけたことから儲かつたのが多いのだ」と、云つてゐた。

大分限者となる心掛けは之れ

儲けることを考へるより、費はぬことを考へるとは貨殖道の金言だが、名古屋で一代分限の大黒屋なども、先づ其心がけを實地に行つた人である。だから召使の下男に至るまで、主人の氣風を呑み込んで、

「ねえ旦那様、風呂の沸かしかたといふものは斯うすれば經濟だと思ひます、風呂桶に水を半分位入れて釜の火を焚く、そして湯が沸き次第に水を入れて一杯とする。少い水は沸きが早い、沸き上つたところで水を埋めて鹽梅をする……どうです、名案でございませう」と、得意さうに話したことである。すると大黒屋の主人は首を左右に振つて、

「いや違ふ、そんな不経済な了簡で俺のうちに勤まるか」と、頗る機嫌を悪くした。權助は驚いた。

「へえ……？ それは一體どういふ譯でございますか」

「さあ、先づ風呂を沸かすなら、最初から水を一杯溢れる位に入れて沸かすのだ、水と云ふものは多かれ少かれ上の方から沸いて来る。上面は手もつけられぬ熱さでも底はまだ水だ。だから之を攪き廻しては不可ない」

「なるほど……？」

「攪き廻すといつまで経つても水で湯にはならない。そこで大かた沸いたと思ふころ、栓を抜いて下の水を流し、湯になつたところだけを残すんだ」

「ふーむ……？」

「どうだ判つたか、上から埋める水は真正正銘冷たい水だ、下から流す水は、温まつたところまでで止める。これを攪き廻すと、熱い湯を温い湯で埋めるも同様になる」

と、大黒屋のコツは萬事これであつた。そこで又細君も豪い。

「大家の御内儀にも似合はず、衣服は平常木綿ばかりとは感心ぢやありませんか、それに三度の食事は自ら臺所へ出て指圖をする。番頭や小僧や女中の病氣には手づから藥を煎じて食事に氣をつけてやる」

何でもないことだが、さてこの眞似は仲々できないもの、それをやり通すところに一つの秘訣といふものがあるのだ。

「どうもあそこの御内儀に逢つちや堪らないよ、我々出入りの者にまで、まるで家の者と同様に言葉やさしくして下さる。これぢや陰日向なんかしようとしてもできないぢやないか」

出入りのものが、斯う嘸き合ふのは、愚痴か喜びか。

「怒じな下されものより、この方が耐へるね」

と、云ふところを見ると、みんな心持よく働くらしい。其處に一人倍の仕事ができて、結局安い給金で人を使へるといふもの。

「愛嬌や親切には金がかからないからね」

と、細君は笑ひながら云つて居る。

黄金を掘り出す呼吸は之れ!

泉州堺の大小路に樋口屋といふ商人があつた。此家の家憲といふのは、世帯を持つたら紬織の羽織一つを三十年間、洗濯せずに着ること、平骨の扇子は紙を張り替へて毎年の夏に間に合はすこと、嫁入衣裳は其儘必ず娘に譲り、孫子の代まで使ふこと。といふのだから如何に無駄使ひに氣をつける家だかといふことが窺はれる。

「お正月のお飾りだつて、別に高價なものを調へなければならぬといふことはあるまい。下手工面をして供へたものを神様がお喜びになる筈はない。伊勢海老なんて勿體ない。車海老で澤山だ、橙は高いから九年母にしる、形や色が似てさへすれば、祝ふ方の氣持に變りはない」と、濟ましたもの。なるほど聞けば尤もな次第だと其年は堺中の蓬萊は、みんな車海老と九年

母になつてしまつたといふ話がある。

其樋口屋へ、ある時夜が更けてから酔を買ひに來た人があつた。番頭は目を覺まして聴き耳を

立てながら

「何ぼうほどかな」

と、訊ねた。すると門口の人は氣の毒さうな聲で、

「誠に御面倒でございますが一文がほどだけ下さいまし」

と、如何にも痛み入つてゐる様子、番頭は「チヘツ」と舌打ちをして、

「なんだ、こんな夜更けに人の門を叩きやがつて、たつた一文とは呆れたものだ」と、口叱言を云ひながら其儘蒲團の中へ潜り込んでしまつた。

其翌朝、主人は顔を洗つて神前に切火を打ち、店へ出て來たが、何思つたか番頭を招んで、

「お前誠に濟まないが、店の敷居のところを三尺ほど掘つてくれんか、昨夜夢知らせで、先代がこの敷居の下へ三百貫文ほど埋けて置いたとのこと、一ト汗かいてはくれまいか」

と吩咐けた。番頭は合點とばかりに鍬を持ち出し、向ふ鉢巻甲斐々々しく、踏み固めた門口をエンヤエンヤと掘り始めた。

「どうだ、まだ錢らしいものは出ないか、壺らしいものに手ごたへは無いか」

と、主人は其穴を覗き込むやうにして訊ねた。深さは凡そ三尺餘りも掘つたらう。けれども一向それらしいものは出て来ない。

「旦那様、昨晚の夢は逆夢ぢやございませんか、一つ屋根裏の方を探してみませうか」
慾と二人づれの番頭は、汗ダクダクで今度は屋根の上へ登つて見た。けれども別に何の變りも無い。

主人は椽臺へ腰をかけてニコニコしながら一服吸ひつけて、

「なあ番頭、それ程までにしても鏝一文も出て来ないところを見ると、昨夜の買物を、起きて賣つてやつた方が、いくら樂だつたか知れやしないな」

と、番頭の顔を眺めた。そして更に云つて聞かした。

「むかし連歌師の宗祇法師が此處に住んでいらしつて、歌道が流行した時、貧しい生薬屋で連歌の好きな人があつた。ある日同好者を招いて二階座敷で運座をやつたが、其主人が附句をする順になつた時、胡椒を買ひに来た人があつた。すると主人は一座のものへ斷りを云ひ、僅か胡椒一兩を秤にかけて、三文の代價を受取り、さて心靜かに一句を思案して附けた。それを見て宗祇法師

師は、さてさて優しいお心がけだと殊の外褒めなされたといふことである。人は皆このやうにして家業を勤めるのが本當に、僅か一文だからと云つて、折角のお客様を逃がすやうでは、一兩の客も逃げて行く、わしも初めは僅かな資本で、一代にかやうに分限になつたのだが、これは經濟のやうくり方一つに因るのである。お前もこの事を聞き覚えて、其中の一つでも眞似たがよい」と、云つて、自分の體験を云つて聞かした。

「借屋住居の人は、毎日日割にしてその家賃を除いて置くがよい。借金もその通り、利子を日割控除の法で一箇月も滞らせないやうにして拂ひ、其元金を運用すれば、自分の金も同様だ。いつれ何時か調子の宜い時があるもの、其時は元金も減らして行く、其次に残つたものが真正正銘の自分の金となる。出金の時も注意が肝腎、自分の金を自分で使ふのでも、小遣帳は必ずつけるがよい。買ひ物は何でも現金主義、通帳は目に見えないもので金嵩が高くなる。萬一質を置かねばならぬやうな時があつたら、外間に構はず賣つてしまふがよい。質といふものは利上げ利上げで何時の間にか買ふ程支拂ふやうになる」

番頭は掘上げた土の上に腰を下したまま、

「有難うございました、有難うございました」

道端にも轉つてる大金儲け！

上方を食ひつめて、ぶらりと江戸へ出て来た一人の男がある。

「江戸は天下の御膝元だ、何かうまい儲けづくがあるだらう」

こんな暢氣な氣持で出て来たものの、偕て江戸へ来たところで、風來坊を待つてゐる江戸ではなし、この男に飯を食はす種といふものは何處にもない。

あつちの宿屋、こつちの宿屋と、多少準備して来た金のあるうちは、見物がてらの仕事探し、ブラブラやつて居たが、さて一文もなくなると急に狼狽出して、

「これは、こんなことをしてゐる場合ではない、何が一ツ探して……」

と、焦せれば焦せる程、聞いたと違ふ江戸である。據るなく知己を頼つて、事情を話し、どんな仕事でも宜いから世話してくれとやつたものだ。

「さうか、そんな譯なら早く来れば良かった、江戸は天下の御膝元だ、金儲けはゴロゴロ轉がつてゐるよ、明日は日本橋の眞中に立つて居て見な、屹度儲け口があるから」

と、これも案外暢氣な男と見えて、快よく寢泊りを承諾した。件の男は云はれるが儘に翌日日本橋へ出かけて朝から晩まで、何かうまい金儲けは無いものかと鵜の目鷹の目見張つてゐた。

けれども江戸の人だつて、小判や二分銀をポロポロ滾して歩く奴はない。往さ来るさの目眩しい人通りだが、さて鼻紙一枚捨てて歩くものもない。

「あいつ、あんなことを云つて、俺に氣安めを云つたんだ、阿呆らしい、橋の眞中に一日中突立つて居て、何が金儲けだ」

彼はプツプツ口叱言を云ひながら歸つて来た。

「どうだ、何か有つたかい」

「チヘツ、人を誑すにも宜い加減にしる、俺は江戸へ立ん坊しに来たのではない、阿呆らしい」

「ほう、これは大分憤慨したな。よしよし、明日は俺が連れて行つてやる。そんなにブリブリせずと夕飯でも喰べて寝るがよい」

さうして其翌日、江戸の男は、例の男を連れて日本橋の真中にやつて来た。

「どうだ、流石は天下の御膝元だけあるだらう、どうだいこの人通りは……？」

「へん、人通りが何だい、人間がぞろぞろ歩くのが何で金儲けなんだい」

例の男は未だ怒つてゐる。

「まあ、そんなに怒るなよ、いま俺が探してやるから、足許へよく氣をつけな」

「昨日から足許ばかり見てゐるんだ、けれども誰一人として二分銀一つ落して歩きやしないぞ」

「よしよし、今日は俺がついてゐるんだ、屹度あるよ、おつと、それ御覽、あそこにあんな大金が落ちてゐる」

「どれどれ、これかい……？ これは大工の小僧が落して行つた三角の切れツ端ぢやないか」

「さうだ、全くだ、そら、其處にも細長い木屑が落ちてゐる」

「こんなものが何だ」

「それだよ、お前の齒がいくら大きくつたつて、この三角の木屑ぢやせせれまいが……？」

「何だつて……？」

「この木屑が爪楊子にはなるまいと云ふのさ、それを細かに削れば誰の口にも合ふ爪楊子になる

細長い木屑は割つて箸になる。爪楊子や箸を只くれる所はあるまい。どうだ、賣れば金になる木

屑だ」

「なるほど」

「さうして餘つた屑は風呂屋へ持つて行くんだ」

「なるほど」

これが日本橋で有名だつた箸屋善兵衛の話。

神様の金を運轉した利巧者

泉州水間寺には面白い行事があつた。毎年初午の縁日にこのお寺へ参詣して、坊さんに申出ると、誰彼の差別なくお金を借してくれたものである。

水間寺といふのは観音様を祀つたものだが、聖武天皇が初午の日に御建立になつたといふ縁起

から、この日に参詣すると厄除けになるし福徳を得るといはれてゐるもので、昔は初午の日には各地から善男善女が續々と押しかけて大した賑ひだった。

ところで、斯うして押しかけて来る貴賤の男女が皆一文二文とこのお寺から金を借りて行つて來年になつて一文を借りた人は之を二文にして返へし、二文借りた人は之を四文にしてお寺へ返へしに來るといふ習慣だったのだが、昔の人は正直だったし、殊に觀音様から御利益を授からうといふので借りて行つた金の事なので、誰一人として之を返へしに來なかつた者とはなかつたといふ。

考へてみると、一錢二錢の金ではあるが一年經つて倍になつて返へるとあつては正に十割の高利だと云つて良い。お寺さんも随分いい儲けをしたものだが、ここに又そのお寺の上を行つた男があつた。

ある年の初午の日だ。年の頃は廿三四、生れつき頑丈さうな骨格構をして、服装はといへばどう見ても野暮臭い、髪形等髷が頭の上で逆立ちをしてゐようといふ風な時代遅れの風である、そして着てゐる着物はと云へば薄汚ない藍無地の至つてお粗末な太織で、之に上田綿の羽織はま

とつてゐるにせよ、それには木綿裏がついてゐようといふ風だ。中位な脇差に、柄袋をはめて人目かまはず尻から下げたところは、どう打ち見てもぞつとする風態ではない。

かうした田舎まる出しの若い男だがやはり水間寺へ参詣に來た者と見えて、境内で賣つてゐる土産物などを肩にして、すかさずかとやつて來たのが御寶前の役僧のところである。

「すみましねエが、錢を千文借してくんろ」

いかにも自然にのんびりとした態度だったので寺役の坊さんが、つい一貫を一本そのまま此男に渡してしまつたが、ハツと氣がついた時には、此の田舎者の姿はそこには見えなかつた。なるほど水間寺では此の日、諸人の申出さへあれば、いくら金でも黙つて借し出すことにはなつてゐたが、それは孰れも一文二文といふ話のことで錢千文といへば其五百人分一千人分のことである。

「一貫といへば大金だが、せめて住所氏名位は聞いたらうなナ」

そんな風の上役から云はれてみると、たうてい其金は返つて來さうにも思はれず係の役僧たちは蒼くなるのだった。

「今までに例の無い事だが、しかし随分と思ひ切つた奴がゐるものだ、御佛の罰も恐れぬとは不敵な振舞ひだ」

といふ風に今更狼狽して、それから後は決して十文以上の大金は借出しをしないと云ふ規則を作つたりしたといふ。

ところが、それから丁度十三年目に、江戸を下つた通し馬が八千九百九十二貫といふ大金を水間寺に持込んで来たのであつた。

さうして、付き添ひの男の云ふには、

「私は江戸小網町の網屋と申す者で、今を去る十三年前御當寺初午の縁日に千文の借銭をして、そのままになつた者で御座いますが、アレが元となりまして、今日では江戸でもつとは知られた物持ちの數にも數へられるやうになりましたについては、當時の一貫を一年毎に倍額にし、二年目には二貫、三年目には四貫、四年目には五貫といふ風にして今日で丁度十三年目、積り積つて御覽の通り八千九百九十二貫となりました。どうぞお納め願ひます」

とのことだつたので、役僧達はスツカリ驚いて、これこそ觀音の御利益とばかり、後世までの

記念にもと、各地から大勢の名士を集めて寺内に一大寶塔を建立したといふ事である。

この網屋の主人といふのは、水間寺で借りた金を持つて江戸へ出て、それから舟問屋を開業し漁師が出漁する毎に水間寺の觀音様の金だから御利益が多いぞ、決して返金を忘れるなどいふ事を尋細かに語り聞かせて金を貸して来たのだといふ。その内にこの觀音様の有難い金が借りられるといふことが、遠近に聞えて来たと思つて、縁起を喜ぶ連中が、我も我もと借金の申込みで網屋の門前は忽ち市をなしたのであつた。

無條件で貸してくれる年に一度の觀音の金を思ひ切つて澤山借り出して、これを十三年間運轉して来たこの網屋といふ男の抜目のなさは正に三嘆の價値がある。

こぼれ米へ目をつけて大分限者

大阪難波橋から西を見渡すと、そこには北濱の米問屋が數千軒をならべ、其白壁は雪の曙にも勝る明るさだ。この米問屋のあたりには俵の山が築かれたり、崩されたりしてゐるので、ま

るで、山が動いてゐるかのやうな感じがする。さうして又、往來は米を各地に送る人馬の轟きで大變な地響だし、川は川で傳馬や小舟で一杯になつてゐる様は仲々旺んなものだといへる。尙も此の北濱の米問屋の有様を眺めてゐると、こちらでは若い衆が竹筒を俵に刺込んで米粒の検査をやつてゐるかと思ふと、あちらでは大きな帳面を擴げてしきりと帳合をしてゐるし、側では十露盤を綴のやうに弾いてゐるといふ忙しさで如何にも大阪屈指の問屋街、いづれも暖簾に名のある繁昌ふりを見せてゐる。

とはいふものの、斯うした大阪の大商人と云つても代々續いたものとはなく、大抵は吉藏とか三助とかいつた番頭が獨立して一代の内に身代を築いた者が多い。

それも奉公をする時、主選みを誤らなかつたせいであらう、同じ番頭生活をして主人がいふたうだとその眞似より外にはできないといふやうな氣の毒な者も世の中には多いのだが、しかし、「身過しは草の種子」といふ諺もあるやうに、生計の手段となれば、これは又別で一寸した才覚一つでどうにもなるものである。

こここの北濱のほとりに一人のみすぼらしい老婆が住んでゐた。何でも話に聞くと、廿三のとき

からズツと後家を通して來た者ださうだが、見れば成る程容貌が良くない。しかし、この老婆は一人の悴があつたので、當人としてはその行末が楽しみだつた譯であらう。

さうして、どうしてこの母子が其日其日を過して來たかと云ふに永年の間西國米を陸揚げする際に、こぼれる筒落米を掃き集めて來たのであつた。

ところが、或る年のこと九州方面で年貢米の改正が行はれた結果として、大阪へ米が非常に豊富に流れ込んで、いくら陸揚げしても、いくら陸揚げしても揚げきれず、どこの借藏も米で一杯になり、終ひには、澤山にあちらこちらへと米俵を積み上げたまゝであつたり、あつちへやりこつちへ直してゐることが多かつたので、こぼれ米を拾つて生計を立てゝゐた例の母子は、掃き溜めた米を朝夕炊いて喰べてゐたのに喰べきれず、たうとう一斗四五升も米が溜つてしまつたといふ。

物といふものは、無い内は溜めようといふ氣になれないが、少々形をなすほどに溜まると慾氣が出てさらに澤山にしようと思出し出すものだが、この老婆も、それからといふものは大いに節約する氣になり、忽ち一年経たぬ内にこれが七石五斗ばかりになつたので、これをこつそり賣り

金に代へて、さらに翌年も翌年もこぼれ米を掃き溜めて行く内に、いよいよこれが嵩んで二十何年目かには其賣上金が生活費にも使つたらうが、兎に角十二貫五百目といふ臍くり金になつてゐたといふ。

かういふ老婆だから、悴のことにしても九歳のときから遊ばせなどはせず小口俵の廢物を拾はせては錢縹をなはせて之を兩替屋に賣つて歩かせたりして人の思ひ着かない金儲けをして來たのだつた。斯うして、次第次第に溜めて行つた小金を、今度は知合ひの確實さうなところばかりを選んで日歩いくらで貸し出ししたりしてゐたが、これから思ひ着いて、更に今橋の畔に兩替屋の小さなのを出したところが、場所が良かったと見えて、朝から晩まで田舎の人などが立寄つて兩替に際がなく、手数料を取りながら丁銀をこま銀に、小判を豆板にといふ風なことをやつてゐる内に、とうとう店を開いて十年経つか経たぬに仲間中では隨一の金融業者と成りすまし、自分の方で仲間から借りることはないが、仲間への貸金はいつも帳簿にギツシリ記されてゐるといふ盛況振りを呈するに至つた。従つて、兩替に來る大阪中の金融業者の手代たちは、この老婆の店へ來ては頭が上らないので、一寸した兩替を頼むにも、腰をかがめて機嫌を取るといふ風だつたといふ。

ふ。

そんな風であるところから、小判市などでも、ここの悴が買ひ出すと忽ち値が騰り、賣に出ればスグ値が下つたものだといふ話だから、自然と同業者も此の男を、旦那旦那と持ち上げて鼻息を窺ふといふ有様だつた。

「なんだ、あの野郎、昔はお母アの尻について北濱でこぼれ米を拾つてゐたんぢやないか。あんな奴の御機嫌を取つて世の中を渡らうなんて馬鹿げたことがあるものか」

と我を立ててゐた連中の中にはあつたが、急場の入費に差當つて困るといふと、平常の勢もどこへやら、この男の店へ無心を申立てるといふ風だつたといふから、金銀の威勢といふものは今も昔も恐しい。

さうして、此の乞食同様だつた男が、それから後には、大名諸侯への金融業者とも取引をするやうになり、やがては、歴々の大商家から嫁を取り、家藏の數も多く拵へて、昔、母親が使つたといふこぼれ米を掃き集めた箒やら世間では貧乏を招ぐといつて厭ふ遊團扇などを家の寶として大切に納めてゐたとのことである。

丹念にこぼれ米を拾ひ集めて、溜めた金で地味な商賣から始めたばかりだが、辛抱強いばかりにたうとうこんな成功したといふ話なのである。

窮すれば通ずる火燧松の賣出

川庄は親譲りの大きな身代を傾城狂ひに費ひ潰して、初めて夢が覺めたかのやうに、自分自身の馬鹿さ加減に呆れた。

「銀の切れ目が縁の切れ目、傾城の戀は矢張り銀持つて來いのこひなのだ」
今更に慙う悔いても後のお祭りでも何うにもしやうがなかつた。

「どうだ、この見窄らしい風態は。これが難波に聞えた川庄の成れの果、かうなつちや色男も載なしぢや」

彼は零落たおのが姿を嘲るやうに慙う呟いたが、それが次第に自棄が手傳つて、
「アハハハ、何をよくよ川端柳だ。ままよ勝手にしやがれ」

吐き出すやうに自分にかう毒づいて、住み馴れた大阪に未練もなく越後さして無分別に放浪の旅をつづけた。

しかし窮すれば通すとやら、彼はあても無い流浪の旅の淋しさから今一度立身しなくてはならぬと堅く己の心に誓つた。そして先づその運試しにと、江州山中村で一尺位の高さの小松を數千本買ひ集めた。

「門松にや早過ぎるし、それに餘り小さすぎやすね」

と、賣主は「何にするのか」と、お世辭旁々訊いたが、川庄は、

「エヘ、まあ一寸その……」

と、曖昧な笑ひに胡麻化して、思ひ切り安値に買ひとつた。彼はそれを枯れぬやうに荷造りして、越前、越後、能登の七尾をかけて、

「火燧松はいかがいかが」

と、家々へ商つて歩いた。北國は九月の末に初雪を見そめ、十月からは本ぶりで、綿を撈つて投げつけるやうな雪が毎日のやうに降りつづく。家々では部を深くたてこめて冬ごもりをする。

そして人々は終日薄暗い家の中で、單調な仕事に飽きては火燵に入るか、圍爐裡に焚火しながら僅に話し合つて其の日の暮して行く。事實、北國の冬は退屈そのものである。天は重苦しく灰色に塗りこめられ、地は一面の銀世界で、一本の樹木だに眺め得られない。彼は、恚うした無聊に苦しむ北國の人達の光景を心に描いて「火燵松」を思ひついた。火燵にあたりながら眺める鉢の木——その思惑が思ひの外に當つて、松は残らず賣れたので彼は少からぬ金儲けをした。

「ウフ、面白いなア。金儲けなんて何處にあるか分らないものだ」

曩には自らの馬鹿さ加減を嘲り笑つた川庄は、今度は自らの精巧さ加減に聊か得意を感じずを得られなかつた。そして、すつかり氣をよくした彼は、更に自分の心を勵ますやうに呟いた。「類の無い商賣に先手をつけることだ」

——と。彼は直ぐに山藪の糸を買ひ込んでそれを京都へ持つて行つて賣つた。京では紬として見るものの、糸としては初めてで珍らしく、西陣の辨柄糸の織ませにお誂へ向きといふので、持荷全部を賣つてしまつた。更に彼はこの機を逸せず、北國から辛鮭をウンと買ひ込んで

江戸へ下り、そこでも商賣が圖に當り、次第に金銀を儲溜めて遂に居宅を江戸に構へ、こんどは名を北國屋と改めて益々商賣を手廣く、遂には以前にも劣らぬ大身代をつくりあげた。

立聞きから商賣を工夫した話

泉州の築濃といふ所に代々六右衛門と稱する分限者がゐた。家は酒と味噌の醸造を業とし、傍ら質屋業をも営み、毎月の儲け金は頗る大きなものであつた。それでゐて主人初め一家の風儀は儉約を旨とし、必要な場合には千金をも惜しまなかつた。召使や出入のものどもには家族のやうに慈悲をかけ、心がけのよい番頭には毎年店おろしの後、相當に金銀を與へ、年期を早めて一家を持たせてやつた。攝津、和泉の兩國に於いて北村といふ暖簾は皆この六右衛門から出たもので其の數も可なりに多く、いづれの店も評判がよく相當に繁昌してゐた。

代々のうちでも最もよく名の知られたのは二代目の六右衛門であつた。隠居してからは名を榮齋と改め、心しづかに雪月花を友とし各地を旅行して名勝舊蹟を探ることを老いの樂しみとして

ゐた。この榮齋若き頃より何ごとにも油断なく、終日商賣に心を砕き、身を粉にして働いたもので、飼鳥をさすが如くに面白い程金儲けの上手な人であつた。

「ご隠居さん、何かうまい金儲けがありませんか？」

と、出入のものが問ふ毎に

「金儲けは、人のせぬ所を考へることだよ」

と、きまつて教へたものだ。其の言葉の如く、榮齋の一生は、人のせぬ所を考へて、いつも危げのない金儲けをした。これ程の人だけに、其の平生のすること爲すことも違つたところがあつた。

泉州の堺に豐井戸といはれた名水の出る井戸があつた。朝晩この水を汲みに諸方から集まつて来る下男、下女の数は夥しいものであつた。榮齋は朝夕の散歩に、この豐井戸附近へ立寄り、その賑やかさを見て楽しみ、男女のあけすけの話を聞いて喜んでゐた。

下男どもも、下女たちも、男は男同士、女は女同士、無遠慮に笑ひ興じて、おのが主人の悪口や、奉公先の内緒ごとや、主家の商賣上の駈引やを自慢さうに話し合ひ、話に疲れて漸つと汲みや、

水を持つて歸るのであつた。榮齋にはこれらの話が……その一つ一つが金儲けの葉であつた。

「ウム、あの何町の藥屋の身代が怪しいな。預け銀を明日にも直ぐ引出して来よう」

下男たちの話からこんな教訓を得た。藥屋は果して數ヶ月の後に分散して、金銀を預けて置いた人達へ多大の損害をかけた。

「江戸では將軍家にお祝ひごとが続くとかでもう其の獻上品の巻絹を買占めに來てゐるんださうだよ。江戸の商人は機敏だね」

何がしといふ大きな呉服店の下男が、こんな話をしたり顔に語つてゐた。これを聞いた榮齋は家へ歸ると直ぐに、江戸の取引先の酒問屋へ幾十駄の酒を送らしめた。

「もう問屋も品薄になつてゐる頃だ、いつもなら需要期に間もあることで未だ注文も來ないだらうが、此の分なら明日にも注文の飛脚が來るかも知れない」

と、番頭どもに思惑を語つてゐたが、果して其の後二三日して、行違ひに江戸の間屋から火急の注文があつた。こんな工合に他家よりも荷の積出しが速かつた。それだけ思ひの外の金儲けがあつた。

隠居してからも、壘井戸へは毎日立寄つて話の立聞きをした。そして金儲けになることは倅に話して指圖を怠らなかつた。かくして六右衛門の身代は二代目にはズンと大きくなり、三代目も益々堅く大きくなり、其の後數代打續いて繁昌した。

乞食の話から思ひ着いた商賣

京都に大黒屋新兵衛といふ大分限者があつた。夫婦の中に男子三人を儲け、それが揃ひも揃つて伶俐なので、一家の幸福は近所の人たちの羨望の的となつてゐた。惣領の新六も、もう年頃になつたので、早く嫁でも娶つてやり、自分たちは隠居して老後を楽しみたいと、内々で隠居の支度をしてゐた。

ところが、世に謂ふ月に叢雲、花に嵐で、新六いつ頃から覺えたか、花柳の巷へ入り浸つて金銀を湯水の如く費ひ出して、此頃では一人前以上の蕩兒となつた。其の結果が帳尻に大穴をあける、遂に親爺から舊里を切つて勘當されて了つた。止むなく江戸へ出て身を立てようと、着の身

着のままて京都を後に放浪の旅に上つた。

時は十二月の末つ頃、懐中には一錢の蓄へもない。寒さは寒し、腹は減る、つくづく親の有難味が身に沁みて、熱い涙が兩の頬を傳つて流れた。大津を過ぎてから――、大勢の子供が何か喚きながらさわいでゐるので、近寄つて様子を窺ふと、一匹の大きな黒犬の死を惜しんでゐるのであつた。新六は流石に商人の子だけに、不圖金儲けに氣がついた。其の犬を貰つて野原で黒焼きにして、それを途々

「狼の黒焼、痢の妙薬」

と、呼歩きながら江戸への旅をつづけた。黒焼は相當に賣れた。品川へ着いたのが六十二日目懐中には二貫三百の儲け銀を残してゐた。黒焼きの賣残りは海に捨て、日も暮れ果てて訪ね行く當所もないので、東海寺の門前に一夜を明した。

同じ門の片蔭に數人の非人が薦を被つて臥てゐた。春とはいへ身を刺すやうな寒さに急に寢つかれぬと見え、小聲で何ごとか囁き合つてゐたが、いつか身の上話となつてゐた。聞けばいづれも腹からの非人乞食でなく、相當に暮してゐた商人や、その倅たち、血氣にはやつて無分別に金

銀を費つた揚句の果がこの零落姿。新六も問はれて今日までの仔細を語つて共に哀れを催した。「話を聞けば皆さんは元は相當の方々、こんな淺猿しい非人と成下るなどはよくよくの不運だ。何か金儲けを考へてやつたら何うかね」

と、新六がいふと

「何うして何うして、江戸といふ所は日本中の賢い人達の寄合、俺たちのやうなものには錢三文でさへ儲けさせはしませんや」

と、一人が答へた。

「でも長い間に、これなら小資本で始めても、相當に儲かるといふやうな商賣は見つからなかつたかね」

「サア、貝殻を拾つて石灰を焼くか、刻昆布や花鱈の量賣か、つづき木綿を買つて手拭の切賣りでもするか。これなら小資本でやつても食つては行けるだらう」

と、一人の年上の男が答へた。同時にこの非人の話が新六の暗い心に一道の明るみを與へた。夜明けに近くなつたので新六は、非人どもに三百の錢を與へてそこを立つた。

「俺の今の三百は大金だが、金儲けを三百で教はつたと思へば安いものだ」

と、勇み喜んで、それより傳馬町の呉服店に知る邊があるのを訪ね行き、次第を話して木綿を買入れた。恰も時は三月二十五日、初めて下谷の天神様へ行き、手水鉢の傍で切賣りをした。この新しい思ひつきが參詣人の注意を惹き、いづれも縁喜よしと買つて手を拭ふものが多く、其の一日の利益は思ひの外に多かつた。それに力を得て毎日神社、佛閣の賽日を選んで、早朝より木綿の切賣りを始め、それで相當の資本をつくつて商賣を手廣くし、十年も経たぬうちに五千兩の分限者となり、同じ土地の商人からは才覺者と敬はれるやうになつた。

工夫一つで大金儲けした九助

「俺はもう五十になつたが、相變らずの水呑百姓とは實に情ないなア。これで一生涯を終るんぢや、死んでも死に切れないぞ」

小百姓の九助は、此頃後から押されるやうな心持ちで、何とかしてちつとは樂な生活をした

ものだと考へぬ日はなかつた。生れながらの貧乏百姓とて牛一匹持つたこともなく、家といへばさしかけの破屋、家具調度何一つ目星いものはなく、其の日其の日の貧しい暮しに、自らの腑甲斐なさを嘆つのであつた。

ある年越の夜であつた。九助は人並みに心祝ひの豆撒きをして、夜が明けてから其の豆を集めたが、フト其の豆の一粒で、自分の運命を占つてみようといふ氣が起つた。そして其の豆の一粒を、人知れず野に埋めて

「この煮豆に花が咲くやうなことがあつたら、俺の運も開けて来るだらう」

かう呟いて、果敢ない心頼みにするのであつた。勿論、あの煮豆が芽を出すものとも思はなかつた。それが恰度自分のやうに生れながらの貧乏百姓が、いかに働いても働いても大百姓にならないのと同じやうに……。しかしこの諦めの一面に、「若しや」といふ淡い希望が、奇蹟の出現を待ちこがれるやうな心地で、毎日埋めた豆に水をやつてゐた。

と、奇蹟は遂に出現した。數日にして其の煮豆の芽が柔かい土を持ちあげて、地上に姿を現した。九助は其意外なのに驚いた。と急に全身の血管の血が沸きたつやうに覺えるのであつた。

と同時に、或眼に見えぬ偉大なる力が全身に漲るやうな爽快な氣を感するのであつた。

「ウム、俺の運が開ける前兆だ」

九助は勇み喜んで、それより一層家業に精勵するのであつた。豆は青々と枝も茂り秋には花を咲き實を結び、一合餘の豆がとれた。九助は翌年其の豆を溝川に蒔きすてて秋に刈入を怠らなかつた。かくして毎年收穫が殖えて十年目には八十八石の豆を收穫れることが出来た。そこで九助は此の豆を賣つて其金で灯籠をつくらせ、夜は灯を點じて街道筋へたてて、往き來の人の道しるべにした。土地の人々はそれを豆灯籠といつて、九助の善き心がけを褒め喜んだ。

煎り豆に花が咲いてから、九助の心が急に明くなつて活氣がついて來た。

「俺もやがて大百姓になつて見せる」

と、いふ自信が出来た。それよりは人一倍働いて毎年身代を伸ばし、次第に田畠を買ひ求めて、程なく大百姓となつた。

「俺は一生煎豆で花も咲かせずに果てるかと思つたが、六十になつて漸く花が咲いた」
と、いひながら、忙しいうちを、毎晩豆灯籠に灯を入れることを忘れなかつた。

九助はまた何ごとも工夫の深い男で、従つて色々重寶な器具類を發明した。その發明になる細櫻へや、唐箕、千石通し、稻扱などは當時の重寶として、それにも少からぬ金儲けをした。それよりも唐弓と稱する打綿の弓を發明したが、これは當時に於ける驚くべき發明であつた。普通の弓は一日に五斤ぐらゐであるが、この九助の發明した唐弓では、一日優に三貫目宛はこなすことが出來た。そこで彼は大勢の人を雇ひ入れて打綿を業とし、それを江戸に廻し、四五年のうちに大分限になり、遂に大和に隠れなき綿商人となつた。

往年の一水香百姓、三十年後に千七百貫目の金を残り、八十八の高齡で大往生を遂げた。

何處にもある草の實と金儲け

不景氣は今も昔も多くの人達の惱みであつた。京の仕出し屋今一町の長兵衛といふ男、商賣の道に抜け目なく立働いたが、打續く不景氣には勝てず、今は元手も食ひ込んで休業同様、毎日溜息を吐きながら身過ぎの思案に暮れてゐた。

或日、不圖思ひついた。

「あるぞ、あるぞ」

これも不景氣に元氣のない女房を顧みて、だしぬけに話しかけた。

「何があるの？」

女房は浮かぬ顔に淋しく笑つて應へた。

「いつかも考へたことだが、藝妓や遊女の状くばりさ、新規で屹度商賣になるよ」

女房はただ黙つて笑つてゐた。

それから長兵衛は、江戸や大阪飛脚の状くばりに真似て一つの袋を持ち、繩手、石かけ、祇園、藪の下、八坂、宮川、建仁寺町などと白粉の香の高い土地、藝妓家や遊女屋へ戸毎に立寄つて、「状くばりの御用はございませんか」

と、足まめに御用を聞いて廻り、頼まれた手紙を道順に束ね、今の郵便配達の様に名宛の家々へ届けた。女の方でも態々人を頼んで客へ手紙を持たせてやれば駄賃が相當に要るのに比べて、長兵衛に頼めば一町一錢といふ安直さで毎日の用が足りる。従つて依頼者が次第に多くなり一人

の足では廻りかね、遂に二三人もの下人を雇つて置く程に商賣が繁昌した。

女房の顔が晴々しくなつたことも勿論である。

「身過は草のたね、つきることなし」

とは、昔の戯作者の書き残した言の葉。それは今の世にも當て嵌まる。生活の方法も、探せば草の實の到るところに盡きざるが如く、容易く求め得られるのであるまいか。

これも昔、油土器の鑄物を新案して賣出した商人があつた。

「チエ、また破れた。こんな脆い土器つちやありやしない」

彼は今買つて來たばかりの土器を破つて、腹立たしさうに其の破片を庭石へ叩きつけながら呟いた。

「破れない土器があるかしら？」

こんな他愛のない空想が遂に鑄物の土器となつた。その上、土器の内面へ朱を塗つたことも新案であつた。

「永代土器」と名づけた。その土器が忽ち評判となつて、大阪ではどこの家の行燈の中でも光る

やうになつた。掃除ごとに油の無駄が少く、燈火が朱に照り映えて、光力が強く美しい——といふことが確かに従來の土器に比して一進歩であつたに違ひない。そして、ふとした此の思ひつきが、忽ち五百兩の身上となり、自分で土器の掃除をしなくてもよい身分になつた。

此の商人後には出世して、入札なしにお大名の屋敷を請負普請するやうな立派な身分となつたが、其の立身の緒口は「永代土器」の賣出し、身過ぎは思の外にあつたのを、遂に探しあてて、今日なら新案特許品。これも、あれもいゝ幸福の草の實を拾つたものである。

今の世にも「身過ぎは草の實」であるだらうか。その草の實が盡き果てて了つただらうか。春が來て花が咲いて、また新しい實を結ぶことが、それが自然であり事實であるとすれば、この言葉にも亦新しい生命を見出すことが出来るのであるまいか。

庭の隅で見つけた金のなる木

昔、都に近い或田舎に、一人の貧しい百姓がゐた。彼は働いても働いても、貧乏から先へ逃げ

出すことが出来なかつた。

「稼ぐに追ひつく貧乏なしといふが、俺は何うした譯だらう。いくら稼いでも貧乏がくつついて来て離れない」

と、嘆息するのであつた。

「そんなに働いてゐてお前は何うして貧乏をしてゐるんだ」

と、訊くと、彼はいつも、

「世柄がわるいんですよ。肥料は高い、米は安い。それで小作料は嚴重に取られる。これぢや貧乏をせずにゐられませんか」

と、捨鉢に答へるのであつた。健康で働いてゐてさへ貧乏から見捨てられない彼は、その後数年間打續いてゐるんな不幸に見舞はれてほんたうに貧のどん底へ落こつて了つた。それ以來彼は以前の貧乏にさへ復ることが出来なかつた。その爲に二十年もの長い間、町から僅かな救護費を貰つて老いの生活を支へて來たのであつた。

「俺は一生この貧乏で果てるのか、いやこんなことでどうする」

と、蹶起的に自らの血を沸かすこともあつたが、それもホンの瞬間で、人生の夕暮をトボトボと歩いてゐるやうな彼には、此の上貧苦と戦つて今日の境遇を脱却しようといふ氣魄も盡き果ててゐた。

「まあ、何とか成るやうになる」

と、果敢ない諦めに生きて行くより外に道はなかつた。

彼の家の――それは豚小屋のやうな小さな汚い家の側に、一本の大きな楓の木があつた。毎年春季になると彼は此の木の根本にバケツを置き、樋を木の幹につけて楓の液汁を採つた。その甘い樹液は、彼にとつては最上の調味料として重寶がられたのであつた。

よく、村の悪童どもが、彼が朝まだ起きない前に、バケツに溜つてゐる此の甘い汁を飲んで彼を失望させたものであつた。

「また餓鬼どもが飲んで行つたな」

彼は口惜しさに地團駄を踏んだものだ。

或日、彼は此の樹液から純白透明な砂糖をこしらへた。楓糖は一般に赤か黒かのどちらかで

あるから、彼の白糖を見て、初めのうちは楓糖と信じない位であつた。彼自身も白糖を製造したといふ喜びに浸るだけで、これが金儲けの種になるとは、少しも思ひ設けぬことであつた。

「これが貧乏の俺に唯一の楽しみだ」

と、その誇りだけに満足してゐたものだ。すると、或人が彼に、

「こんな素敵な白糖が出来るなら、これからドシドシ製造して菓子屋へ賣つたら何うか」

と、勧めた。彼は其聲に應じて殆んど反射的に膝頭をボンと叩いて叫んだ。

「金儲けだ金儲けだ」

彼の聲は急に若返つたやうに力に充たされた。と、その憔悴した顔色が急に紅潮し、双の瞳は希望に燃えて爛々と輝いた。

それより彼は結晶楓糖なるものを製造して賣出した。果して良く賣れた。そして其特許期間に約二十萬圓を儲けたのである。楓糖を所有してより四十年、その長い間この金のなる木の眞價を發見し得なかつた彼は、偶然の暗示を得て遂に巨萬の富をつくつたのである。

負うた子が大金儲けを教へる

或大工さんは不景氣で仕事もなく、毎日外へも出ずにブラブラしてゐた。こんなに遊ぶ日が可なり長く續いたので、夫婦に子供三人の生活に差支へるやうになつた。

「もうお米がないんですよ。どこかへ行つてお金を少しこしらへて来て下さいな」

彼の細君は不機嫌に膝詰談判をするのであつた。氣の小さい彼は堪らなくなつて外へ飛び出したが、どこへ行つても金を貸してくれる宛がなかつた。彼は仕方なしに海岸へ出て、乾いた温い砂の上に坐つて溜息を吐いてゐた。

「厭になつちまふな。仕事はなし、金はなし、女房はガミガミいふ、チエーだ」

彼は吐き出すやうにかう呟きながら打ち寄せる女浪男浪を茫然と眺めてゐた。そこに海水に濕つた櫂の木片が眼についた。彼はそれを拾つて来て、手にしてゐたジャックナイフで彫物を始めた。それは何といふことなしに、謂はば憂さ晴しに、退屈凌ぎの手慰みに過ぎなかつた。やがて

一つの木の鎖を彫りあげた。

いつの間にか近所の子供が彼を取り巻いて彫りものをする手先きを眺めてゐた。彼は今彫りあげたばかりの木の鎖を子供たちに見せながら、

「サア、拾つた奴に呉れてやるぞ」

と、二三間先へ投げ出した。子供は驅出して奪ひ合ひを始めるのであつた。彼は又彫りものを始めた。暫時のうちに一匹の猿を彫り上げた。それが決して凡庸の手腕でなかつた。見物の大人の一人が感心しながら彼に云つた。

「君はそれだけ彫刻が上手なんだから、玩具を拵へて賣つたらいいぢやないか」

「どんなものを彫つたらよいか、判りませんからね」

と、彼はその人を見あげながら答へた。

「それあ君、家へ歸つて子供と相談し給へ、子供の欲しいといふものを彫れば屹度賣れるよ」

見物の人が教へてくれた。彼は眼が覺めたやうな明い心地になつて家へ歸つて行つた。彼の細君は彼を玄關で迎へながら、

「お金は出来て？」

と、訊くのであつた。

「誰も貸してくれないよ。だが、もう二三日何とか遣繰つてくれ、いい金儲けを考へたからね」

と、彼は元氣に彼女を説得するのであつた。しかし、彼女は不安さうに訊いた。

「マア安心しておいで。俺は大工よりいい金儲けのあることを知らずにゐたんだよ」

そこへ彼の三人の子供が集つて來たので、彼は先づ相談を始めた。

「太郎や、お前はどんな玩具が好きだい」

「自動車が好きいや」

「二郎は何だい」

「汽車が欲しいや」

「花子は何かいい」

「お人形さん」

子供たちは直ぐにでも買つて貰へるものと思つて、次から次へと欲しい玩具を考へ出しては云

ふのであつた。

彼は仕事場へ行つて、一生懸命になつて玩具を彫り始めた。

自動車、汽車、人形、鏡臺、机、椅子、土瓶、お釜、下駄等々。

二三日の後、これらの木彫の玩具が店先へ並べられた。それが直ぐ賣れて了つた。又違つたのを陳列した。が、又賣れて了つた。彼は次々に子供と相談しては彫り、それを並べると直ぐ賣れる。ジャツクナイフ一本で、数年のうちに大きな金持ちになつた。

鱒が鱒を生む、金が金を産む

彼は左官屋であつた。或お店を失敗つて以來、其處此處の日雇に細々ながら生活をつないで来たが、不景氣と云ふ形のない人食ひ鬼は彼の手から僅かな仕事さへ奪ひ取つてしまつた。毎日仕事を探して歩き廻るもの、あふれる日ばかり續くので、彼は疲れ切つた重い足を引摺つて家路を辿りながらも、此の頃機嫌の悪い細君の険しい瞳を思ひ浮べるのであつた。

「お前さん、けふは？」

果して険しい瞳が待つてゐた。

「ウム、駄目だつた」

彼の答の終らぬうちに、彼女の怒は爆發した。

「どうするの、妾を乾し殺すつもりなの。もうお金なんぞ一錢もありやしませんよ」

「俺も、どうも仕様がねえ」

彼は彼女の怒に任せてゐた。その翌る日、彼は口を探しに出る勇氣も挫けて朝寝をした。それが彌が上に細君の機嫌を損じた。

「いつ迄も寝てるちやお掃除の邪魔ですよ。さつさと起きて、けふは口を見つかるか、お金を拵へて来るかしくちや、家へは入れないから……」

彼は顔も洗はず、勿論飯も食はずに家を飛び出した。否、追ひ出されたのであつた。家を出たが行く先はなかつた。そつと家の裏口へ廻り、灰桶の上に腰かけて心もうつろに、眼ばかりボンヤリと前を流れる小川を眺めてゐた。一時間も二時間も……。

不意に大きな水音がしたと思ふと、一尾の大きな鱒が跳ね上つて、又小川の中へ水音をたてて隠れた。彼は物に弾かれたやうに灰桶から飛び下りた。

「金儲けだ！」

と、呟きながら、いきなり小川に飛び込んで、その大きな鱒を手捕りにした。そしてそれを誇り顔に細君に見せた。

「その鱒賣つたらお金になるでせう」

「ああ賣れるとも……」

彼はそれを物持ちの知人のところへ持つて行つて買つて貰つた。

「君に五圓やらう、その代りもう一尾捕へて持つて來たまへ」

其の知人は五圓の金をくれたのであつた。勿論彼の貧乏を知つてゐるので、それがお情けの意味でもあつた。彼はその五圓を細君に手渡し、更に鱒を取りに出かけた。細君も大喜びで手傳つた。夫婦で小川の上から下までを探したが、何處にも鱒はゐなかつた。彼は失望して近所のお寺へ行つて、其の住職に相談した。

「わしは坊さんのことで鱒取りのことは解らないが、そんなにお金になるものだつたらお前さんとこの裏の小川で、鱒を養殖したら何うか」

と、勧められた。彼は早速鱒養殖に関する研究を始めた。

「一尾の鱒は一年に三萬六千の卵を生み、一尾の鱒は一年に四分の一封度ぐらゐになり、四年後には一尾の鱒は四噸に殖えて、一封度が五十錢位に賣れるんだよ」

と、彼は細君に研究の結果を話した。それから細君も乗氣になつた。一尾の鱒が五圓になつた味忘れられなかつた。彼は裏の小川の上手と下手に堰を周らせて鱒の養殖を始めたのであつた。それから十年間経たぬうちに彼は一ぱしの養魚家の泰斗となつた。

金蔓を探し當てたトマト成金

京都の郊外に一人の貧しい水香百姓が住んでゐた。夫婦で朝から夜遅くまで眞黒になつて働いて通してゐたが、生活はいつまでも樂にならなかつた。殊に數年來打續く不景氣に、農村は殊の外

寂れて夫婦の生活は苦しいドン底に喘ぐやうになつた。

「こんな毎日一生懸命に働いてゐて、それで食べてゆけないとすると、俺たちは一體何うすればいいんだらう」

彼は熱い溜息をつきながら妻に相談するのであつた。

「副業には蠶も養つてゐるし、繩も縛ひ、蓆もつくる。わたしたちにはこれ以上、働く身體と時間がありませんわねえ」

若い妻も大きく溜息をついて細い首をうな垂れた。

「といつて、この儘ぢや、やがて食へなくなるばかりだ」

男は半ば自棄氣味に慄然として兩手を拱きつつ思案に耽るのであつた。と、何を考へたか、彼は突然かう訊ねた。

「今年はトマトは何うだらう。去年よりは良きさうに思はれるが……」

「ええ、すつと良きさうですよ。その代り安いでせう」と、彼女は答へた。

「あれは俺たちの村からさへ随分澤山京都へ出してゐるが、市の人は一體どんな料理に使ふんだらう」

「澤山買ふところではソースにするんださうですよ。トマトソースに……」

その翌る日、彼は京都へ出て、方々の知り合ひを訪ねてトマトの行方を調べた。その結果、大量に購入するところでは、みなソースにしてゐることを確めたのであつた。殊に其製法が割合に簡單で、少しの経験も持たない彼等夫婦たちにも容易く出来るものであつた。

彼の心は何となく明くなつた。それは、出来る事なら自分たちも、ソースを造つて今の苦しい百姓生活から逃げ出したいといふ希望をもつたからであつた。彼は勇躍して我が家に歸つた。

「もう明日から百姓は止めた。ソースを造らう、トマトソースを……」

彼は京都で調べて来たことを細君に話した末に、かう決心を語つた。彼女も喜んで賛成した。

長い百姓生活を止める未練といふものが少しもなかつた。其れ程、今の生活が苦そのものであつたからだ。

それから早速、トマトソースの製造にかかつた。自分の畑から採取したトマトだけで可也のソ

ソースが造られた。其朱鷺色を帯びた美しいソースを壺に詰めて初めて京都へ賣りに行った時は、不安でもあつたが、言ひ知れぬ嬉しさに充たされてゐた。

ソースは早速に賣れ仕舞になつた。質が良かったのと、値段の安かつたのとで、行く先で歡迎されて後の注文まで引受ける優勢を示した。そして其の年は相當に儲かつた。

次の年の夏には更に工夫を凝らし、前年の幾倍ものソースを造つた。安いトマトを買入れてソースにして、相當の値で賣れて行くのを見た彼等夫婦には、過去の生活の徒勞であつたことが今更に残念で堪らなかつた。

「早く商賣がへをしてよかつた」

「ほんとうにねえ」

夫婦は其の年の利益を勘定しながら、喜びの會話に陶醉するのであつた。

二三年後には立派なソース製造者になつた。従つて利益も大きくなつたことは言ふ迄もない。

一寸考へただけで取附いた男

米は安い、野菜は安い、繭は安い。農村の窮乏は年一年と深刻を加へて行くので、小百姓は働いても働いても生活が楽にならなかつた。いや、それどころか、年一年と不足を告げて行くので、泣く泣く先祖代々からの田地を賣つて土地を離れるものが、何處の村にも毎年數十人を數へるのであつた。

此處にも其の窮迫の一組、生れ故郷で眞黒になつて働いてゐながら食へることも出来なくなつた若夫婦が相談の上で、僅な旅費を作つて東京へ出て來た。が、何をすればよいのか、彼等には最初から成算がなかつた。

「東京へ行つたら何とかなるだらう」

と、ほんやりした心持ちで、仕方なしに出て來たのであつた。東京へ着いた日には、懐中僅に二十圓を餘すのみであつた。

「あんた、東京で何を積りなの？」

「まだ考へてゐない」

「今夜は何うする積りなの？」

「行き當りバツタリだよ」

「心細いわ」

若い夫婦は、それこそ本當のあてなしに日暮れの四谷新宿通りを、足も重たげに歩いてゐた。東京の冬は寒かつた。都の人たちは男も女も外套の襟を立てて、舗道の上を急ぎ足で歩いてゐた。薄い霧の中に電燈の光りのぼんやりとした中を電車や、自動車が、けたたましい騒音を立てて走つてゐた。

「あんた、お腹が減いたわ」

「ウム、俺も減つた、何か食べよう」

そこにおでんの屋臺店が、大きな鍋から湯氣をたてておでん特有の香ひを發散させてゐた。夫婦の空つぽになつた胃の腑が其の香に誘はれて動き出したので、夫婦は急に空腹を感じて堪へら

れなくなつた。

そこには一二人の先客があつた。鍋の中にうごめいてゐる芋、豆腐、蒟蒻、しのだ、ちくわ、がんもどき等々が、いかにも旨さうに自分たちの食欲を唆るのであつた。彼は夢中になつて二つ三つを食べた。それは空腹であつたから食べられたのであらうけれども、二度と食べる氣になれぬものではなかつた。

「おでんてまづいものねえ」

彼の妻はいつた。

「ウム、まづかつた」

「わたし、もつと美味いもんかと思つてゐたわ」

彼女は不平さうであつた。

「だが、美味くしようと思へば出来ないことはないだらう」

刹那、彼は自分の何氣なく妻に答へた言葉が、何かの暗示でもあるかのやうに心を惹かれたのであつた。

「ねえお前、あんなまづいおでんでさへ商賣になるんだらうから、俺たちはもつともつと美味いおでんをこしらへて賣つたら何うだらう」

彼は希望に満ちた腫を妻に向けながらかう相談した。妻に異存があらう筈がなかつた。

「さうしませうか」

翌る日一日、夫婦は材料の買出しや、おでんの煮方やに就いて一通り教はつた。その上に、夫婦で味をよくすることを研究し、食器も瀟洒なものを買入れて早速屋臺店を開業した。

流石に大都會である、この新規の店にもお客が次から次へと來た。そしてその人達が、

「こりやあ美味い」「素敵だ」「おつだ」

と、褒めてくれた。それが次第に評判となつて夫婦の屋臺店が繁昌した。そして一夜に七十圓を賣上げる大屋臺店となつた。

自分に嘘をつかぬ心懸で成功

石工の留さんは、一日の仕事から解放されて我が家へ歸つたが、今日工事場で親方が仲間の石工たちを叱つてゐた言ひ草を思ひ出すと、いかにも不愉快で、いつものやうな朗かな氣持には成れなかつた。

「オイ、仕事あ請負ひだよ、ちつたあぞんざいでもサツサと片づけるんだ」

親方は大聲でかう呶鳴りつけてゐた。

「てめえ、まだその石につかまつてるのか、馬鹿野郎！ 道樂に石を削るんぢやねえや」

その隣りの石工にも、こんな罵聲を浴びせてゐた。——頭腦にこびり附いてゐる斯うした不愉快な場面を思ひ出すと、彼の心は急に暗くなるのであつた。晩酌も、いつものやうに旨くはなかつた。

「請負だから仕事はぞんざいでもいい？ 俺にはどうも分らない。仕事をよくして依頼者に喜んで貰へたら、どんなに仕事の仕甲斐があるか知れないんだがなあ」

彼は此處まで考へると、親方の無責任に強い腹立たしさを感ずるのであつた。と同時に、いづぞや親方が何かの折に、得意げに話してゐたことが思ひ出されて更に不愉快を増すのであつた。

「請負仕事を馬鹿正直にやつてゐたら利益どころか大變な損になつて了ふ。出来るだけ胡麻化して手を抜いて儲けなくちや嘘だ」

こんな言を云つてもゐた。請負業者が、こんな考へで仕事をするので、依頼者は安心して仕事を託すことが出来ない。

「依頼者の身にもなつて見なくちや可哀さうだ」

彼は親方の意見と反對に、依頼者の安心出来る仕事をする事を考へた。言ひ換へれば依頼者が安心して委せ得る請負——その仕事をする事を考へた。

それは何も親方の云ふやうに手を抜かなくても宜い、胡麻化さなくてもよい。請負當初の契約通りに、正直に仕事をすればよいのだ。不當の利益を得ようと考へないで、當然の利益を公然と儲け得るやうな仕事をすれば可いのだ。

彼は斯う決心すると同時に、獨立して請負事業を始めた。そして最初に引受けた仕事は大きな川の堤防工事であつた。彼は一生懸命にやつた。自分達の村でも護る考で、手を抜くどころか事毎に餘計に手をかけて、如何なる大洪水にも決潰しないといふ堅固な堤防を作りあげた。

「依頼者から喜ばれるやうな仕事が出来ればそれで俺は満足する」

——と、彼のいつてゐたやうに、出来上つた堤防は實に完全無缺なものであつた。依頼者は衷心彼の勞に感謝した。それ以來、請負業者として彼の評判は急に高まつた。従つて彼の業運が次第に繁昌した。

「まづたく此頃のやうに請負業者の質が悪くちや依頼者が氣の毒ですよ。俺は此の弊風打破の爲に二十年間、依頼者の安心して委かせ得る請負をやつて來ました。然し、これが當り前なんでしょう。當り前にやつて來た俺が請負業者として珍しいといふなら、矢張り多くの請負業者が當り前のことをやつてゐないといふ事になるのです」

と、彼は云つてゐる。一介の石工職から身を起した彼は、今二千萬圓の大請負業者として斯界羨望の的となつてゐる。或人が彼に其の成功の秘訣を問うた時に、彼は、

「當り前のことをやつただけですが、謂はば自分で自分に嘘をつかなかつた爲でせう」と、答へた。

留さん——それは今日業界に時めいてゐる某氏の前名である。

古雑誌の中から百萬兩拾つた男

二十歳で獨立して小さな帳簿店を開業したが、資金は乏しい、得意はなしで、彼は毎日浮かぬ日を送つてゐた。

それでも、獨立した其の事が、彼には大なる出世でもあり、愉快なことでもあつた。商賣は振はなかつたが、悲惨な過去の生活を振返つて見ると、今日一軒の主人となつた自分の境遇が彼にとつては幸福そのものであるといはねばならなかつた。

父の事業の失敗、冷かりし繼母の眼、八百屋の小僧、帳簿店の小僧——それからそれへと過去の思ひ出が、自分の胸の中に翼をひろげて行くことに、何うしても成功して、たつた一人の弟を幸福にしてやりたいと思つた。父の残して行つた借金を拂つて重荷を下ろさねばならぬと思つた。

「それにしても俺のやうな不幸なものも少いだらう。八歳にして慈母に死別し、十二歳にして

小僧にやられ……」

と、彼は又しても涙を誘はれるのであつた。獨立したとはいへ、當時は眞箇食ふや食はずの貧乏のどん底にゐたので、自分とはまかく自分を頼りにしてゐる肉親の弟がいちらしくて堪らなかつた。

「女々しいことを云つちやゐられない。只働くんだ、働くんだ」

酷い工面をして一臺の名刺印刷機械を買ひ入れて、本業の傍ら夜十二時から印刷にかかり、それで生活の不足を補ひながら弟を學校へ通はせることにした。仕事の忙しい時は夜二時三時、時には曉へかけて印刷機を廻してゐることも少くなかつた。

「Aさん、仕事も大切だが、身體をいためないやうに氣をつけなくちや」

折々、巡回の巡査が感心して聲をかけて行くこともあつた。然し、貧乏はいつまでも附き纏つてゐた。弟は學校から歸つてから、夜遅くまで印刷の手傳ひをした。

「兄さん、腹が減つた」

弟はよく空腹を訴へたり、勿論、彼は其れ以上の空腹を忍んでゐたのであつた。

「さうか、焼諸でも買つておいで」

弟に二錢の焼諸を買はせて、それを二人で食べて僅に饑を凌ぐのであつた。それでも弟は嬉嬉として喜んでゐるのを見ると、彼の眼頭はいつも熱くなるのであつた。

或寒い夜、彼はいつものやうに弟に焼諸を買はせて食べながら、何気なくその包紙へ眼をやつた。それは雑誌の紙らしい。

「貧兒より百萬長者になる迄」

といふ大きな初號活字の標題が、焼諸以上に彼の注目を惹いた。食るやうに讀んで見ると、一貧兒が奮闘して大機械商となるまでの立志傳である。その幼少よりの境遇が彼のそれに髣髴たるものがあるのだ、彼は宛然、自分への教訓であるかのやうに緊張した心持で幾度か讀み返した。

「逆境は發憤の良師なり」「天地間頼むべきものは唯獨自の精神のみ」「自家の運命は自家之を開拓せよ」の文中の幾つもの金言が、彼の全身の血を沸き立たせるのであつた。と、彼は、「發憤だ、努力だ」

と、思はず口を衝いて出る力ある言葉に、自分ながら魅せられて了ふのであつた。

それからの彼は、店の經營に全精神を打ち込んで努力した。殆んど寢食を忘れて苦心し、奮闘した。

「俺を成功せしめるものは誰でもない、この俺なのだ」

かくて彼の奮闘は次第に酬いられた。折柄勃發した歐洲大戰、好景氣、彼はその好景氣に乗じて勤儉力行を忘れず、遂に一流の帳簿店となることが出来たのである。

國家を考へるのが成功の秘訣

福岡市の貧しい一漁家に生れたAは、漸つと小學校を卒業したが、上の學校へも入ることが出来ず、毎日魚賣りをしながら、苦しい父の家計を助けてゐた。

「何あに、學問なんか學校へ上らなくても出来るんだ」

負け嫌ひな彼は、一日魚を賣つて廻つて、その歸途には必ず懷に忍ばせ置いた「論語」とか「孟子」とかを繕いて、一生懸命に讀みながら我が家へ歸るのであつた。

「オーい魚屋、魚を賣るのにそんな學問なんぞ要るまいが？」

彼は、よくかういつて擲擻されたり、冷嘲されたりした。

「これからの世の中は、學問が無くちや駄目だ。俺あ偉らしいものになりたいんだ」

彼は、人が何と笑はうが一向頓着なしに、毎日書を読みながら歸つた。夢中になつてゐるので、天秤棒を擔ぎながら往來の馬にブツ、かつたり、溝へ落つこつたりしたことも珍らしいことになつた。

「魚屋の癖に學問なんかしたり、あいつ生意氣な奴だ」

と、彼を狂人あつかひにしてゐるのもあつた。

福岡からは昔、大學者の貝原益軒を産んでゐる。熱血の勤王家平野國臣を出してゐる。彼は一町人であつたが、彼の血管の中には學者の血と勤王家の血と靈犀相通するものがあつた。

「魚屋の子が學問をするのが何故をかしいんだ」

彼は益軒に發憤した。そして將來、益軒のやうに、國臣のやうに、偉らしい人にならねばならぬと心に誓つた。

或日のことである。彼はいつものやうに魚を賣つての歸り途、首をひねりひねり讀書してゐた。そこへ通り合せたのが藩の漢學の先生であつた正木昌陽であつた。彼は少年の奇特な行爲に感心しながら、

「おぬしはそんなに學問が好きか？」

と、質いた。

「ハイ、大すぎです。これからは學問の世の中です。何をするにも、學問がなくちや駄目だと思ひます」

と、魚賣りの少年は爽かに答へた。昌陽先生は感嘆稍久しうして、

「わしが教へてやらう。明日からでもわしの塾に來なさい」

かくてAは稼業の傍ら昌陽の漢學塾へ入り一心不亂に漢學を學んだ。學問が好きであつただけに、彼は成績大に擧つた。この學問好きが、遂に貧しい彼の父を動かさし、父は唯一の財産である住宅を賣拂ひ、その金で彼を中學校へ送つて勉學せしめた。そして卒業後彼は上京して一ツ橋の高等商業に入り、苦學して芽出度く卒業したのが、彼の三十歳の時であつた。

家庭の事情で初めは中學教師や商業學校の教師をしてゐたが、後實業界に入り、大連に渡つて福昌公司を經營して遂に五百萬圓の巨富を作つて、滿州の濞澤子として尊敬の的となつてゐた。「私の高商時代の校長矢野先生が口癖のやうに云つてゐられましたよ。苟くも經濟學を學び商業の門に入るからには、國家の繁榮を第一に心掛けなくてはならぬ。私を後にして國家を先にする——これが成功の秘訣だと。私の今日あるのは眞箇先生の賜です」と。彼はいつも謙遜して、儲ける傍ら絶えず善根を積んでゐた。

大震災の中で考へた大金儲け

二年間の軍隊生活を首尾よく勤め終つた青年Mは、除隊後故郷の琉球へも歸らず、行李一つの荷物を携へて、垢汚みた久留米餅の書生姿で飄然として上京した。彼の生家は貧しかつた。その上父も母も死んで了つてゐた。そこに彼を待つ何一つの楽しみはなかつた。それよりは、一日早く東京へ出ることは、一日早く成功する譯になるのだと、一筋に

未來の成功を期して上京したのであつた。

二週間ばかり一生懸命に就職口を探し廻つて、漸く内閣恩給局の一雇員に採用される事となつた。日給一圓十錢、それは彼一人を養ふに十分であつた。しかし、それは唯食ふだけであつた。

「俺は將來實業家になりたい、それにはいつ迄もかうしてゐられないんだ。何か金を儲ける方法がないか知ら」

と、絶えず考へつづけた。それにしても先に立つのが資本である。漸く食つてだけ行ける彼には、心は逸るだけで何うすることもできなかつた。

「さうだ、あの軍醫さんに頼んでみよう」

彼は不圖、軍隊時代世話になつた一軍醫のことを思ひ出して訪ねて行つた。軍醫は自分の兄弟でも訪ねて来たかのやうに喜んだ。軍醫は在營中の彼をよく知つてゐた。正直で勤勉で、堅忍不拔の意志の所有者で、評判のいい看護卒であつたことを知つてゐた。

「どれ程要るんだ」

「二三百圓欲しいんです」

「それなら俺が貸してやらう」

軍醫は奥から五百圓の公債證券を持つて来て彼の前に置いた。

「これを無條件で君に提供するから、賣るなり擔保にするなりして資金をつくり給へ」

と、氣持よく貸してくれた。感激性の強い彼は、軍醫の思ひがけない厚い情に感謝の熱涙が止めどなく流れるのであつた。

「軍醫どの、御恩は決して忘れません」

彼はその金で化粧品を仕入れて恩給局からの歸途毎日行商をして歩いた。傍ら内閣に於て辨當屋を開いた。この辨當屋が思ひの外に當つて繁昌した。

彼が内閣職員の晝食の用意をしてゐるときであつた——大正十二年九月一日、突如地上の一大破壊が現出した。關東の大震災火災——それは悲惨の極をつくしたものであつた。

將來大實業家とならうと努力をしてゐた彼には、この不意の天災が何等かの暗示を與へず置かなかつた。

「ヨシ、愈々俺の旗あげる時が來たのだ。昔の紀文のやうに、今の澁澤や、大倉や、淺野のや

うに、ここに何か風雲に乗ずる機會を見つげなくては駄目だ」

彼はその夜ひつきりなしに揺らぐ大地の上に、炎々として燃えあがる火災と、濛々として吹きまくる熱煙をよそに、凝と腕を拱いて考へつづけた。そして翌くる日直に大阪に走り寝具店に入つて一週間ばかり枕の製法を習ひ、その見本を携へて焼け跡の東京で賣り出した。

賣れた、賣れた。大きなデパートからなど大口の注文さへあつた。彼はやがて工場を急造して自分で枕を造つた。それでも應じ切れない程の注文があつた。

「枕は知れたものだが、日本の寢具には十分改良の餘地がある。それを一つ考へてみよう」

やがて發明されたのがパンヤ蒲團であつた。綿の代りにパンヤを入れる。これが又飛ぶやうに賣れた——かくて彼は東京一流の大蒲團商となつた。

紀文の夢を實現させた幸せ者

紀州の寒村の一小學校教師は、明けても暮れても紀文の夢を見つづけてゐた。彼は義務年限が

終ると、弊履を捨てるやうに小學校長の椅子を投げ出して大阪へ飛び出した。そして大正の紀文にならうと紀州蜜柑の大賣出しを始めたが、それは見事に失敗した。そして又もとの小學校教師となつて、捲土重來の好機を狙つてゐた。

大正八年の頃、世界大戰の生んだ好景氣が日本の隅々までも侵して、國民は眞に空前にして絶後ともいふべき大景氣に有頂天になつてゐた。そして到るところに大小の成金が簇出して、世はまつたく商人の世と謳はれた時代であつた。會ては紀文たらんとした彼は、この大景氣に直面して、何うして落着いて教鞭を執つてゐられよう。

「千歳の一遇だ」

再び實業界に飛び込んだ。幸ひ賣物に出してあつた某洋品雜貨店を譲受け、引續き商賣を始め、いくらか腕の鳴りを鎮めたのであつた。しかし、一度は苦い失敗の經驗を嘗めた彼である。

「今度は失敗してはならぬ」

獨り、心にかう誓つては我と我を勵まして商賣に一生懸命となつた。素人の商賣であつたが、好景氣の絶頂に立つてゐた際とて、店は意外に繁昌して、開店當時一日二三十圓の賣上であつた

のが、二三ヶ月後には二百圓から三百圓と、約十倍以上の賣上を見たのであつた。

資金が潤澤になるに従つて彼は大量廉賣を心がけて行つた。

「大量を安く仕入れて安く賣ること」

理論として知つてゐたことを、實際問題として初めて痛感するやうになつた。従つて問屋を説いて安く仕入れ、問屋以外に製造家と直接の取引をする。そして大量を安く仕入れて、それを安く賣つたのであつた。この素人離れした放膽な商賣ぶりが、次第に大阪市内の問屋や製造家に認められて其信用を高めて行つた。

そこへ幸運が廻つて來た。ある羊毛紡績會社から副製品として作つた沓下、オーバーセーターの大量販賣の相談を持ち込んで來たので、大膽なる彼は直にそれを引受けたのである。

「沓下約一千ダース、大小オーバーセーター五百ダース」

この大量廉賣が一躍彼の存在を大阪一圓に知らしめた。彼は美事、この大量を思ひのままに消化した。流石に紀文の夢を見つづけてゐた彼である。

それ以來、彼の大量廉賣が幾度か行はれたが、それは毎回必ず成功した。次で彼をして名をな

さしめたのが、大阪府後援の下に大阪博物館の一部で、問屋聯合大廉賣を催したことがあつた。それが不景氣の下り坂であつたせゐるか、非常の失敗で問屋連は多量の殘品の處理に困つてゐた。彼はこの好機を見逃さなかつた。逸早く問屋側と交渉を始め、殘品全部を破天荒の見切り値段で買ひ占め、之を店頭に山積して彼一流の大廉賣を試みた。無論これも大成功であつた。斯くて彼は數年ならずして大阪一流の洋品雜貨商の一人となることができたのである。大阪で有名な長者Mと云へば誰でも直ぐに首肯ける人である。

悴の心を鍛へ上げる親ごころ

江戸で屈指の大商人紀惣は、流石に一人の悴を旅に出すことが不安であつた。しかし、悴の將來を考へると、他人の中へ出すことが何よりの修業である。可愛い子には旅とは云ひながら、放したくない我を折つて、京都の知人へ商業見習ひの意味で、客人とも奉公人ともつかず預けることにした。

「いづれ金満家の悴の遊び半分だよ。嬌奢風流を見ならつて来る位は關の山だらう」

紀惣の腹を知らない人たちは、こんな蔭口をきいて笑つてゐた。紀惣はそれを聞くにつけても早く悴を天晴れ一人前の商人に仕立てて、我が家の跡をとらせたものだと思つてゐた。

彼は不圖「祖父辛勞、子は樂、孫乞食」といふ諺を思ひ出した。「賣り家と唐様でかく三代目」といふ古い川柳などを思ひ出して、淡い不安の思ひに沈むのであつた。

「商人は金の貴さを知ることが第一だよ。それさへ身に沁みて判つて来れば、無駄費ひするのが惜しくなるものだ」

彼の悴への餞別は、この商人としての心得一箇條であつた。

悴の預けられた先は大佛の耳塚あたり、洛外とはいひ小家軒を並べてゐる一廊の中にある、さのみ裕福でない一商家であつた。そこで悴は小僧同様に立働いた。が、「金の貴さ」が容易に判らなかつた。

軒並みの小さな家々では、商賣といつてもホンの名のみで、店には商品らしいものも並べてはなかつた。どこの家でも其の店先で、一家總がかりで手内職をしてゐた。朝から夜遅くまで扇の

骨を削つてゐる家もあつた。下駄の鼻緒をつくつてゐるのもあつた。紙袋を貼つてゐるのもあつた。聊かの間も手を休めずに致々として働いてゐた。

江戸の大商人の一人息子として育つて来た彼には、それらの内職の意味が判らなかつた。扇の骨を削つたり、鼻緒をつくつたり、紙袋を貼つたりして幾千の錢になるのかも知らう道理はなかつた。ただ終日營々として働いてゐながら、其の生活が如何にも貧しさうなのを見て、時には自分の所持金を恵んでやりたい衝動に驅られたことも幾度かあつた。

「子供の生れないやうに神佛に祈願してゐる人達もありますよ」

と、聞かされたこともある。それが後になつて皆な

「金が無いからだ」

と、教へられた。そして彼は、貧乏から来る種々の、悲しい氣の毒な世相を見て、初めて父の

云うた

「金の貴さ」

を、臆げながら知ることができた。

同じ町の名主の倅が放蕩の結果勘當されたことを聞いた。これも遊びの金に困つた結果、悪事を働くに至つた酬いだと判つた。

「金は大切になくちやならない」

彼は熟々金の貴さを感じ得た。金の有難味を知ることが出来た。

數年ならずして江戸に歸つた倅が、藁一本さへ無駄にしない心遣ひを見て、紀惣は我が心勞の甲斐あつたことを喜んで、安心して身代を譲つたのであつた。紀惣の身代は益々大きくなる一方であつた。

嬌奢、風流を見ならつて歸るだらうと笑つた人たちも、反對に「つましい京の風俗」のみを見て歸つた倅の惻愾を感じると同時に、父なる紀惣が、可愛い我子を、思ひきつて洛外の一商人へ預けた心かげにホトホト感心するのであつた。

「金をつくる人は違ひますねえ」
——と。

大三井も元は斯麼ことから

甲「君は日本の長者番附筆頭に出てゐるあの三井某、あれが二十年前までは何麼商人であつたかを知つてゐるかね」

乙「知らないねえ」

甲「さうだらう。其の當時はそれこそ名もない一小商人に過ぎなかつたからね」

乙「それでも今日、日本一の長者になる奴はどこか違つたところがあつたらう」

甲「イヤ、別になかつたよ。自身に袋をかついで西陣の買物に廻つてゐたところなどは、平々凡々の一小商人さ」

乙「それで大金満家になるなんて、餘程運がよかつたんだね」

甲「運なんて、あてにならないものをあてにしちやいけないよ」

乙「ぢや、金満家になつた譯は？」

甲「傍目もふらずに、商人としての道をコツコツ歩いて来ただけのことさ」

乙「説明が平凡すぎるね」

甲「しかし、この平凡なことをやり遂げる奴は少いんだよ」

乙「理窟より實行といふ譯だね」

甲「それぞれ。彼はその實行家だつたのだ」

乙「どんなことを實行したかね」

甲「先づ商人に限らず朝は早く起きること。朝起は三文の徳があるといふ程だからね」

乙「ぢや、彼は朝は早起したのだね。では夜は？」

甲「夜は遅く寝たね。そして一生懸命商賣大切に稼いだものだ」

乙「それでは睡眠不足といふ奴になりさうなものだが……」

甲「ナアニ、そこは氣一つだよ。終始緊張した心を持つてゐたら睡眠不足なんか何でもない」

乙「それから何うしたかね」

甲「人一倍稼いだよ」

乙「稼ぐに追ひつく貧乏なしたね」

甲「さうだ。一方に稼いで、一方に無駄費ひをしなかつた」

乙「當世流の緊縮屋だったんだね」

甲「君のやうに儲けないで、親の財産をいい氣になつて費つてゐるのは大違ひだ」

乙「餘計なことをいふなよ。要するに金儲けは眞面目に稼ぐこと。其の金を溜めるには無駄費ひをせぬといふことだね」

甲「マア、そんなものだ」

乙「眞面目に商賣してゐて損をする奴もあるが、これなら必ず儲かるといふ商賣はないかね」

甲「そりあ、あるよ」

乙「どんな商賣だ？」

甲「人のしない商賣をすることだ」

乙「そいつめ難かしいな」

甲「昔、元日におこし米を賣つて儲けた男があつたよ」

乙「おこし米なんて珍らしくもないが……」

甲「元日に賣つたといふのが、人のしないところに思ひついたのだ。元日だけに呼び込んだ方ではさう値切りもせず、大抵は高いと思つても我慢して買つたから大いに儲かつた」

乙「そりあ、うまいところへ氣がついたものだね」

甲「此の男また錢の小賣りを始めたよ。マア移動兩替だね。ウンと儲けたさうだ」

乙「それも珍らしいね」

甲「さう感心ばかりしてゐちやいけない。ちつとやる氣がないかね」

乙「一つ考へてみよう」

甲「考へてみ給へ、人のせぬところに必ず金儲けがあると井原西鶴さへ書いてゐる」

一つ先へ目をつけて大成功

金儲けの名家、貨殖の天才。支那及び支那人には古來、貨殖に關して頭が下る話が多い。

支那の昔、蜀に卓といふ人があつた。元來卓は趙の國の者であつたが、建國三千年、未だに内亂の絶え間のない支那であるから昔は、一層戦争が劇しく常に遠交、近攻、戦争の絶え間がなかつた。卓もその戦争のお蔭で、——つまり、あの阿房宮を築いたり、不老不死の靈藥を日本に取りに寄越したことに依つて有名な秦に、自分の國の趙が破られ、しかも、卓は先祖代々鍛冶屋として大金持であつたので、秦の奪掠を受けた上、捕虜にされて葭萌といふところに流されてしまつた。

弱つたのは卓である。財産は取上げられる、片田舎の葭萌には流される。腹が立つてたまらないうが、長いものには巻かれる——商人であり、工人である卓は、何しろ國破れて山河なしの悲境に陥つたのであるから、どう恨んでも仕方がない。

「悪い運命に廻り會つたのだから仕方がない。しかし、こんなことでへこたれては、先祖に對しても申し譯がない」

と大いに發奮して考へた。そして葭萌よりは、もつと都から遠い處、汝山といふ山の麓の方にすばらしく大きな芋の産地があると聞いて卓は、その地方に移住することを願ひ出た。秦の新政

府の役人から云へば、なるべく亡國の恨みを持つて居る奴は、一人でも都の近くに置かない方がよい。なるべく遠いところに追拂ふ方が始末がよいので、卓の願ひは聞届けられて汝山の下臨邛といふところに移住させられた。

卓は、臨邛に住ふことになつて、ひどく喜んだ。何しろ大きなお芋が遊んで喰つても、そこらの人が死ぬまで喰ふほどあると云はれる沃土を持つた土地である。土地が肥えてゐることは、人もまた肥えて居ることを證明する。だから……

すでに、多くの人を知つて居られるやうに支那の百姓の生活は米食の生活でなくて、芋食の生活であるのだ。だから、そのお芋が鴨と云ふ大きな鳥が、ちつと蹲まつてゐるやうな格好の大きなお芋が、ふんだんにとれると云ふので人も肥て居る。しかも、その大きな芋を作るには卓のお手ものの商賣である鍛冶で作つた、鋤や、鍬が必要なのは必定だ、よい土地を持ち豊になつて居る人ほど決してなまけものは居ないのだ。

そこへ見込みをつけた卓の見込みははづれなかつた。

「こんど店を出した卓と云ふ奴の家の品物はなかなか使ひええ、それに安い」

そんな評判が立つほど、彼は勉強した。趙の都の鍛冶屋の千萬長者として、お百姓が、どんなものが必要で、どんなものを喜ぶかと云ふ位は、よく心得て居る卓だ。彼はその全機を傾けて鍛冶屋さんの商賣を熱心に勵んだ。腕に覚えの努力をした。正直な田舎の人に都會仕込みの新知識でよい商品を賣つて喜ばれない筈はない。彼の努力と熱心は報はれて、日ならず裕福になることができた。

落着いて、そして少しの資産と同時に土地に馴染みができれば、それから、もう富を伸すのに大した努力は要らない。彼は信用を得、その商品は喜ばれて、ぐんぐん金持になつて行つた。「あの時は、涙で日を送つたが、何がしあはせになるか分らない。風の便りに聞くと都の方はまた、戦争があつて人が殺されたり財産を奪はれたりしてゐるさうだ」

卓は妻を顧みて、ほつとしたやうに、にこやかに云つた。妻は脅えたやうに、「戦争はここまで追馳けてまゐりませんかしら」

「心配するには及ばない。どんな物好きでも、ここまでは戦争の手が伸びない、私達は子孫まで安全だ。安心おし」

卓は悠々として妻を慰めた。そして、もうやがて、千人もの僮僕を使ふほどに富んで來たし、そして戦禍のない、沃土に恵まれた郷に平和であることを喜び合つた。

腕一本脛一本が唯一つの資本

周の大金持に白圭といふ人があつた。そのときこそ彼は、大金持として天下に名のあるものであつたが、しかし彼は、決して生れるとそのまま大金持ではなかつた。と云ふよりも、親父から貰つたものは脛一本、腕一本の、まことに金に縁のない男であつた。そして、大富豪となつた今の彼も、なほ、世人が大富豪であるとともに、その甚しい節約家であることでも有名であつた。

當時、白圭と比較される大富豪は、李克といふ男であつたが、これは大百姓或ひは、食糧原料供給として、巨萬の財を積んだもので、白圭は、實に投機に依つて儲けたのであるから、その富の性質には、非常に相違があつた。しかも、すぐ富めば、王侯を氣取りたがる古代支那で、白圭は、その王侯を氣取る浪費を、極端に輕蔑して徹底的に節約家であつたのだから、一層有名で

あつた。

とにかく白圭は、貧乏であつたので、どうかして金が儲けたいと思つた。それとともに、彼の性格として、非常に投機が好きであつた。やまこを張ることが好きなのだ。喰ふものを喰はずに蓄めるといふ話があるが、彼は喰ふものを、決して錢で買はうとしない——「おあまりはありませんか」と云つて貰つて歩く乞食こそしないが、殆ど他所のあまりものを食べるやうにして、食はただ腹が膨れればよく、着物は何か着てゐればよいといふ程度に儉約して、一錢二錢と蓄へ、何か機会がくるとその蓄た錢をすべて投げ出して、一やま張つてみるのである。

「太陰卵に在れば糠なり」と云ふことがあつて、天文に依つて不作と感ずれば、直ちに米の買占を行ふのだ。人が危めば危むほど、白圭は投機的に勇敢に、冒險的にやつて、結局互利を占める。そして、周第一の大金持になつたのだ。

それとともに彼は投機の神様のやうに云はれて彼の智慧を拜借に来るものも多くなつた。しかし白圭は、傲然と、その節約王として、無類に質素な座敷で嘯いて云ふのに

「米を澤山收穫しようとするのには、よい種を播かなければならない。しかし、錢を儲けるには

いちばん悪い米で澤山だ。能く飲食を薄くし、嗜欲を忍び、衣服を節し、事を用ふるに僮僕と苦樂を同じくし、この平素の用意を以て、一度機会を掴んだら猛獸擊鳥の發する如き勢で進めばよいのだ。これが秘訣だ。この自ら強する心と實とがなければ、吾輩の金儲け秘術は、百の説法をしても屁の河童だ」

と答へるのを常とした。一攫千金を夢みる投機師は、明日の色合が分らないといふので殊に派美に派美にその日その日を暮すのが普通であるが、さすが、支那の投機の神様は、その心がけが違ふ。

「投機師にとつては、投機といふことがすでに何ものにも變へられない樂しみであるのに加へてその投機が當れば、何十倍かの金儲けがあるのだ。だから、投機師の資本であり武器であり、唯一の道具である錢は、爪に火を點して、一文でも多く、いざ事があるといふ機会まで溜めて置かなければならない——」

といふのが白圭の主張だ。日本の現代の投機師の魂は、支那の投機の神様の言葉で、根本から入れ替らなければならないかも知れない。

轉身の妙を得た大成金のコツ

范蠡といふ人の名は、例の兒島高德の詩に依つて非常に親しいものにされてゐる。つまり後醍醐天皇を、逆臣足利尊氏が隠岐の島にお移し参らせようとした時、院の庄の假のお宿で高德が是を奪ひ奉らうとする。機未だ到らずで、深夜行在所の庭に忍び入り、櫻を削つて微衷をお訴へ申上たといふ例の詩

天勾踐を空うすることなけれ

時に范蠡無きにしもあらず

の范蠡である。

で范蠡と云へば、此の詩に依つて人口に膾炙し、従つて會稽の恥とか、又は臥薪嘗膽とかいふ文句とつなぎ合せて、越王勾踐の無二の忠臣としては憶えられてゐるが、是が有名な、而も甚だ立派な貨殖家であつたことを知る人は甚だ少い。

史記を繙くとその話が詳しく出てゐる。

勾踐が呉の軍から會稽の地で手痛い目に會されて、それから苦心である。所謂新に臥し膽を嘗めること十年、見事にその恥を雪ぐといふのであるが、勾踐の此の大業を成就せしめたものは實に勾踐一人の力でなくて、會稽の役後起用した范蠡に負ふ所が非常に大きい。寧ろ、范蠡がその大半を作り上げたといつても誇稱ではない。

范蠡は勾踐の命を受けて計然といふ男を用いたのである。計然は識見の甚だ高い人であつた。——國家を興すには民を富ませるより外に方法はない。民を富ませるとは、つまり農家の庫に米穀を喰らせることだ——

彼の動かすべからざる考へである。當時に於ける民の生業が農中心であつたのは云ふまでもない。是を今日の言葉で云ふと民力涵養といふことになる。民力の充實を外にして何の國家、民を瘦せさせて何の帝王、計然は確信しきつてゐる。此の大確信の前に彼は范蠡を助けて天下の政を押切つたのである。夫に天理にも甚だ詳しい

——六年目毎に豊年がある。六年目毎に旱がある。十二年目毎に饑饉がある。古來の例に徴して明らかなことである。是を豫め洞察して、十分國を富ましめ、兵を備へてかかれれば、吳王又何者ぞ——

と云ふのである。今日でこそ學者も素人もマルクス以後統計より外に頼るものがないのを知つた等と豪さうなことを云ふが、吳越の昔にあつてよく歳の穰、歳の饑を知つたといふことは、餘程古今に明察のある人でなければできない仕事でない。

兎に角斯くして范蠡は克く計然の言を容れ、克く勾踐の意を承けてその霸業を成就せしめた。「遂に疆吳に報い兵を中國に觀し、稱して五霸と號す」

と史記卷百二十九に載せられ、千年の後も英名を唱はれてゐる所以である。范蠡は右の様にして勾踐の大業を成就せしめた。其處で彼は考へたのである。

——自分は最早盡すべきことを盡して王にも報いた。是から一つ自分の家を興すことに意を用ひてみよう。

今日の言葉で云へば、爲すべきことは成し遂げ、心に懸る雲もなくて、甚だ期らかな氣持である。

る。

彼は官を辭した。そして宰相の印を釋き一介の布衣として世の中に出た。彼の胸中には深く成算がある。

算がある。

——計然には策が七つあつた。その内に越王が是を用ひたのは漸く五つである。それにしてもあれだけの仕事が出来たのだ。今その七つを縦横に驅使すれば、恐らく家を興すこと位は朝飯前であらう——

彼は先づ齊といふ國に入つた。そして名を子皮と易へたが、更に陶に行つて朱公と名乗つた。陶と云ふ國は丁度支那の中央に位し、四通八達の要路を占めた所、天下の人馬悉く一旦陶を経て諸國に交易するのである。彼は此地を本據として商賣を始めた。賣るにも買ふにもちやんと時機を心得て居る。相手の良否を見抜く事は掌の物を鑑別すると同じである。嘗て計然といふ大器を用ひた様に、使用人の端々にも甚だ留意する。

だから彼は十九年の間に三度百萬長者となつたが、貧民救済とか治水事業とかいふ社會奉仕のために三度とも是を天下に撒いて了つた。金を庫に噎らせて人の苦みを拱手傍觀する様な彼では

ないのである。

後老衰して業を子孫に傳へたが、是が又よく父祖の意をついで、百萬長者になつたと云ふ事がある。積善の餘慶が長く兒孫を幸したといふわけである。

出でては天下の宰相、入つては貨殖の王、勾踐の様な人物は歴史の上にも、甚だ類を絶したものである。

巷談篇

場所へ全身を打込んだ成功者

「只今世界第一の大都市ニューヨークに参つてゐます。當地で小賣商業をいろいろ研究いたしてをりますが、その結果は、あの土地を拜借致させて貰ひさへすれば、たちまちにして大成功のできるといふ自信が益々大きくなるばかりであります。どうぞ、この蜂谷の熱心と研究とに免じて土地拜借の儀お許し下さいませう。遙にニューヨークの天地より貴家御一統の御健康を祈る」

大阪大軌電車驛前の地主さんは、驚きの瞳をみはりながら一通の手紙を読み終つた。

「俺の家へ外國から手紙なんぞ寄越す人が無いと思つたが、蜂谷さんからだよ」

「まあ、読んでご覧」

彼の細君も手早く読み終つて、

「ご熱心ですね。こんなに仰有るんですからお貸ししたら何う」

と、笑ひながら夫に話しかけた。

「ウム、驚くよ。こんなに足掛け三年も拜み通しにされちや、さうさう強情も張れなくなるね」

「ほんたうに、變つてゐる人ね」

「貸すことにするか」

「外國からまで拜まれてはね」

「ハアハハハハ」

地主夫妻は朗かに笑ひあつた。

蜂谷といふ人の手紙がサンフランシスコからも、ロスアンゼルスからも、シカゴからもといふやうに、旅の先々から、かうして借地交渉の手紙が來たのであつた。

蜂谷！ その人は誰あらう、今大阪七大百貨店の一として時めいてゐる、三笠屋百貨店の經營

者蜂谷經一氏その人なのである。

彼、蜂谷氏は四年前までは一介の會社員であつた。社用で米國へ渡つて彼地の商業界を視察して歸つてから商人になることを決心した。それには地の利を得ることが第一條件であると、彼は市内各所を廻つて研究した結果、大軌電車驛前、従前の三笠屋食堂のある地所であつた。

ところが當時その地所は、さる資産家の庭の一部で、一體に高い塀が圍らされてゐた、蜂谷氏はこの地所に眼をつけたのである。そして此處に米國式食料品店を開業することが唯一の目的であつた。

早速地主を訪うて借地の交渉をしたが、相手は金に不自由のない資産家、勿論應諾しよう筈がない。

「そりあ、あんた、いかに仰有つても駄目ですよ。田や畑と違つて庭になつてゐるんですから、きつぱりお断りいたしますよ」

と、てんで相手にならない。蜂谷氏はその日はあつさりと歸つた。

「よし、あの地主を口説き落してやらう。この地所を手に入れる、入れぬが俺の運命の岐路なん

だ。いまに屹度承知させてみせるぞ」

この堅い決心と熱とで、第二回目の地主訪問をやつた。それから以後といふものは毎月一回づつ地主を訪問して借地を交渉した。地主も仲々頑固であつた。斯くて三年間、蜂谷氏は所信を枉げずに交渉を續けた。お互に氣心も解るまでに打とけた仲となつたが、依然として地主は應諾しなかつた。そのうち蜂谷氏は會社の用で再び渡米するやうになつた。渡米中も彼は借地交渉を斷たず、旅の先々から前記のやうな借地懇願の手紙を出したのであつた。

蜂谷氏の熱誠が三年目の末に遂に地主を動かすことができた。そして其地所に新築されたのが最初の三笠屋食料品店である。果して店は繁昌した。それから四年目、蜂谷氏は大阪の百貨店王となつたのである。

人の人氣を一寸借りた氣轉者

女優五月信子の人氣がクライマックスに達してゐた頃であつた。彼女の一座が岡崎市の某劇場

へ出演することとなり、けふ愈一行が乗り込んで來るといふその日、その時間に、驛前の廣場から劇場に到る沿道は、世にも美しい人氣女優の素顔を見んものと、潮の如く押寄せた群衆で身動きもならぬ雜沓を呈してゐた。

「もう汽車が着くぞ」

誰かが嗷鳴ると、群衆はワァーとしきりざわめいて、今か今かと待ちわびてゐるところへ、人目を惹く服装の少女が二三人小さな印刷物を一人一人に配つて歩くのであつた。

「何だ、不穩ピラぢやないか」

「美人に楯突く奴もないだらう」

「なに、男を取られた女がさ」

「フ、フ、止せや」

その印刷物には五月信子の寫眞をみどり色に刷り、その下に、

岡崎劇場に出演の

五月信子嬢が

康生町みどりやを訪問

みどりやから美しい花輪を贈呈します。

十四日午後

といふ文句が印刷してあつた。謂ふ迄もない事、みどりやといふ玩具店の宣傳文なのである。岡崎驛前の雑沓で、しかも自動車で疾駆する五月を十分に見ることのできなかつた人だち、群衆に揉まれてチラリとさへ見ることのできなかつた人だち、けふこそ早くみどりや附近で彼女の素顔を見物しようと、午後の康生町は昨日にも劣らぬ人出で大變な騒ぎ、みどりや附近は珍らしく警官が出張つて、聲を囁らして交通整理をするといふ有様であつた。

「東本願寺の法主の巡錫があつた時であへ、これ程の人出はなかつた」と、町の老人達は驚異の瞳をみはつてゐる位であつた。

午後二時過ぎ、五月信子は他の女優達と共に、眼の覚めるやうな洋装で自動車でみどりやを訪れた。群衆は只顔も分らずに喊聲をあげた。五月の歸つたあとも、群衆はみどりやの附近を去らなかつた。何といふことなしに惹きつけられて、みどりやへ入つて玩具を買つて歸る人も多かつ

た。みどりやでは當日のお客に漏れなく五月の繪葉書を贈呈した。その繪葉書には、

「新しい玩具やいろいろな藝術的な品がございますね、感じのよいお店ですこと。みどりやにて五月信子」

と、鮮かに印刷してあつた。同時に一圓以上お買上のお客には五月信子からといふ名義で、「五月信子」といふ名入の容器に入れた菓子を、景品として贈呈した。

これがまた大變の評判になつて、當日のみどりやは千客萬來といふ大繁昌であつた。

みどりや玩具店は主人松井弘氏が四年前サラリーマンを止めて、僅か五百圓の資本で開店したのであつた。岡崎市は近くに名古屋といふ大都市を控へてゐる關係上、小賣店の繁昌しない土地なので、みどりやも、それはみすばらしい玩具店であつたが、松井氏が當時の人気女優を利用しての宣傳ぶりが、多大の効果を奏して、

「玩具はみどりや」

といふ標語ができた位に、岡崎市内の人気商店となつた。そして今日では岡崎名物といはれるくらゐの大商店となり、傍ら喫茶店をも經營し、此店で洋食も作るといふ繁榮ぶりである。

七轉び八起きの型を行つた男

「やあ、こりや大變だ」

外出から我家へ歸つた獨身者の彦兵衛さんは、座敷へ入るや否や、頓狂な大聲をあげて嘔吐した。

裏返しして間もない疊の上には、泥足のあとが點々としてついてゐる。

「畜生ッ、空巢覗だな」

彼は座敷の真中に下かと座つて、二間しかない家の中を見渡したが、その兩の眼から大粒の涙が、一雫二雫、頬を傳つて流れた。

資本金百圓で一本立ちの商人となつたのがつひ五六日前である。足袋地木綿を仕入れて市内の足袋屋へ行商して歩くのだが、それでも彼は自分の商賣として、朝早くから夜遅くまで働きつづけた。けふ始めて商賣を休んで商品全部を宅に置いて用たしに出たのだが、ホンの二三時間の間

に、其の商品全部と自分の衣類全部とをマンマと盗まれて了つたのだ。

「獨立の商人は、獨身者では不都合だ」

まだ二十三歳の若さだつたが、郷里の親戚から美しい細君を貰つた。その花嫁が不幸にして同棲僅か一ヶ月にして病死した。

「愛妻の死」

初めて遭遇した人生の大きな悲しみに、彼はすつかりセンチメンタルになつて、毎日商賣を休んで泣いてゐた。然し、食ふ問題がいつまでも愛妻の追憶に耽らせて置かなかつた。

「死んだものは可哀さうだが、俺の生涯はこれからののだ。ここで挫折しては一生うだつがあがらなくなつて了ふぞ」

彼は勇氣を鼓して行商に出た。それから二年経つて二度目の細君を迎へ、漸く新家庭を作つて商賣にも觸みがついたかと思ふと、二ヶ月経たぬうちに、或夜隣家から失火して、所有品一切を灰にして了つた。

多感な彼は、獨立以來僅か二ヶ年の間に起つた三度目の、この大きな不幸に失望落膽、餘所の

見る目も氣の毒な位であつた。

「東京がもう厭になつた、田舎へ歸るかな」

暫時は商賣も手につかず、悲嘆に暮れてゐたが、美しい細君がいつも優しく彼を慰めては元氣をつけるのであつた。

「貴郎、人間は七轉び八起きていふぢやありませんか。落魄て田舎へ歸るんでは、貴郎の男が立ちますまい」

「ウムさうだ、俺が悪かつた。これから新規蒔直した」

彼は三度目の大難をも雄々しく堪へつつ、夫婦心を一にして奮闘を續けた。もう死物狂ひである。そして働くことだけが、過去の大きな悲しみや苦しみを忘れしめるのであつた。そのみならず、業運が次第に上向きになつて、得意も漸次増え、毎月の利益も相當に擧げ得られるやうになつた。彼は斯うして家業を大切に一生懸命に稼ぎながらも、常に金儲けの機會を狙つてゐた。明治二十七八年の日清戦争は日本軍が連戦連捷で、國民は戦捷の祝に騒ぎ廻つた。やがて平和も克復して日本軍が戦地から凱旋するやうになつた。若い頃木綿問屋に奉公してゐた彼は、此の

機會を利用することを忘れなかつた。そして、逸早く戦捷に因んで斬新な意匠を凝らした手拭を造つて賣出した。

「凱旋手拭」

これが戦捷に酔つてゐた國民の嗜好に投じて、賣れるわ賣れるわ羽が生えて飛ぶ様に賣れた。

「君、凱旋手拭てのを知つてるかい。これだよ、見せてやらう」

「俺だつて持つてゐるよ」

「俺はこれで十本目だよ」

彼は行商を止めて店賣専門の手拭商となつた。今や一ケ年の賣上高數十萬圓、有名な鈴彦手拭店主鈴木彦兵衛氏の一生は、眞箇に涙ぐましい奮闘の歴史である。

五年で一萬圓の金を作つた男

銀座の信盛堂——それは洋品店として餘りに有名である。店主は中島常五郎氏、遺が一代で、

それも僅に二十一年間で此の大成功を勝ち得た人だけに、其の過去の蹈んで来た道は悉く、商人として新に世に出でようとする人々にとつて、生きた教訓であり、模範である。

中島氏は十五歳の時、神田の洋品店信盛堂本店の小僧となつた。濫い家庭から初めて他人の集りへ飛び込んだ彼の眼には、その朋輩であり先輩である小僧や番頭どもの行爲が、餘りに放埒であり、主家に對して不忠のものであつた。店員たちは店の商品を胡麻化しては買食ひをする。夜は矢場などへ遊びに行く。新参ものの彼はいつも店番を強ひられ、時々口留として御馳走を振舞つて貰つたが、純眞な彼には、こんな醜態を見ることが堪らなく怖ろしくもあり、腹立たしくもあつた。

この多くの店員に對する義憤が、遂に彼をして建白書を認めて主人に提出せしめるに至つた。主人は最初、

「新米の泣ごとか」

位に思つて軽くあしらつてゐたが、この頃の店の淋れ方を思ふと、如何に新参者の意見でも、一概に退ける譯には行かなかつた。建白書は拙い文字ながら、主人を思ふ眞情が流露してゐる。

「私の眼から見ますと店員の大部分が墮落してゐます。眞面目に店の爲を考へてゐるものはありません。これでは店がさびれる一方です……」

とある。主人は凝と考へる日が多かつた。そして、それから間もなく店の改革が斷行された。

常五郎氏に對する主人の信任は、それ以來厚きを加へて行つた。従つて彼の出世も早く、十九歳で遂に番頭の主席に抜擢せられて、店の一切を切盛りするやうになつた。

或期間主人夫婦の留守中を、十九歳の常五郎氏は店務の一切を委託された。

「俺の商賣だと思つて一生懸命にやつて見よう」

と、彼は決心した。それより多くの番頭や小僧を指揮して、朝早くから夜は十二時迄働いた。

「何うしたら店が繁昌するだらう」

これが彼にとつての大なる宿題であつた。然し商才に富んだ彼には、解答は其れ程むつかしいものでなかつた。

「良い品を安く仕入れて、他店より安く販賣すること」

これが、その解答である。そして店員を鞭撻して客の心を捉へんとした。一方店頭や窓飾の陳

列法に苦心を拂ひ、常に潑刺たる清新の氣を漲らしめることに努めた、果して作戦圖に當り、客足は次第に繁くなり店頭は千客萬來。そこへ主人は歸店してこの繁昌ぶりに大喜び、中島氏の手を取つて感謝の意を表した。

主人に忠實であると同時に、店員の待遇改善について彼、中島氏は屢々主人に建言勸告した。その結果、きまつた給料の外に賣上の歩合を支給されることになつた。今日の所謂勞資爭議を、彼は談笑のうちに解決したのである。

斯くて十五ヶ年の奉公は、彼を立派な商人として資格づけた。今の銀座に獨立開業したのが明治三十九年の彼二十九歳の時、店は彼一流の商智商略でトントン拍手に發展した。開業當時の借金は二年間で完済する。開業三年目には二千圓の定期預金が出来た。五年目には一萬圓の預金が出来たといふのだから、以て如何に順潮に帆を揚げて來たかが判る。そして、それより二十何年目の今日、彼は個人經營として日本一の大洋品店となつたのである。

儲を考へないで儲けるコツ

東京の近郊、澁谷の百姓の三男に生れた田丸龜吉君は、小學校を卒業しても上級の學校へもやつて貰へず、百姓の子は百姓といふので、毎日家業の手傳をしていつの間にか二十二歳を迎へた。妻帯して一本立ちとなつたが、やつぱり百姓でもするより外に道がなかつた。それでも人一倍草花が好きで、其栽培が上手だったので、東光園といふささやかな草花屋をやつたのであつた。それは百姓と同じい勞役で、三年間泥土に塗れて働き通して、やつと小僧一人を雇ひ入れた程度で生活であつた。

「夜店の植木商人になつたら何うか」

と、勧められた。然し、餘りに正直な田丸君には、縁日商人のやうなベテן賣は出来なかつた。彼は、フト或植木商のやつてゐる、そして此の頃漸く流行り出した植木の損料貸を思ひ出した。

「これなら草花の傍やつて行けるだらう」それから毎日東京市内へお得意をこしらへに歩き廻つた。植木鉢を澤山載せた車を引いて朝から晩まで歩くことは随分苦しい労働であつた。それも思つた程の利益は擧がらなかつた。然し、當時の田丸君には、斯うした商賣をするより外に何うすることも出来なかつた。彼は倦まず厭かず、毎日東京市内を廻つた。

恰度、其の頃、澁谷の氷川神社の大木が四五本暴風雨に倒れたので、その取片附の請負入札があつた。彼も人に誘はれて入札の仲間に加はつた。然しながら、彼にはこんな入札などは初めてであつた。

「お宮さんのことだから儲けちや悪い。寄附のつもりでやつて見よう」

彼は人足の日傭料だけ、本當の實費で入札を行つた。無論、仕事は彼の手に落ちたのであつた。

「澁谷町への奉仕だ。いや神さまへの奉仕のつもりでやつて見よう」

彼は儲を考へないで喜んだ。が、仲間は驚いた。嘲つた。

「あいつ新米だけに馬鹿なことをやる」

と、忌々しがつた。多くの場合、斯うした請負師仲間は、神社、佛閣の仕事といふと儲けられ

るだけ儲けようとしたものだ。それを田丸君は反對に奉仕の觀念で引受けた。この奇特な、純眞な心掛けが、遂に酬いられる日が來た。それは澁谷町が町營水道を敷設した時の各種の工事請負が、又も巨額の差で東光園主田丸君に落札したのであつた。彼は入札の際に考へた。

「公共的事業の請負に多く儲けるのは不徳義な事だ。俺は社會奉仕の觀念で仕事をして見よう」

と、事實に於てその請負價格は非常に安かつた。然し、彼のやつた仕事は實に立派なものであつた。この一つの大きな仕事の完成が、土木請負業としての東光園を次第に盛大に導いた。上野公園の改造、日比谷公園の手入といふ風な公共的土木事業が續々と東光園の手に落ちた。同時に植木損料のお得意もその事業先が悉く取引先となつたので、急速の發展を見せたのであつた。

今日の東光園は使用人百數十名、毎日數十臺の大形トラックで植木の配達に追はれ、更に造園並に土木の請負で年收五十萬を突破するといふのであるから素晴らしいではないか。

倦まず撓まず文字通りの男

「小學校だけは卒業さしてやるが、それからは一人をやつて行かねばならぬ」

未だ小學校へ通つてゐる彼に、親どもは斯う云つて勵ますのであつた。然し、彼は本當に、

「それ以上、親の厄介になつてはならぬ」

と、思つた。幼いながらも親どもの貧乏な生活が解つてゐた。それだけ何うしても早く獨立してはならぬと思つてゐた。

小學校を卒業してから洋品店の小僧となり二十六の歳まで勤続して一本立ちとなつた。資本と云つても店員生活中に貯蓄した五百圓だけで、主人からも物質的援助を望めない状態であつた。なく無論、生家にも其の資力がなかつた。

「五百圓ぢや店も出せないが」

彼は凝と考へた。一本立ちになつて、立ち續けて行けるか何うかを考へた。

「資本が少ければ少いで、やつて行ける方法を考へよう」

幾日幾夜か熟考の末、彼は洋品の行商を始めようと決心した。

「これなら店がなくてもやつて行ける。お得意先で商品を陳列して見せさへすればいいのだから」

當時神戸市では洋品の行商といふものを見なかつた。恐らく彼が嚆矢であつたらう。それから毎日、洋品類を積んだ小車を牽いて行商を始めたのであつた。然し、初めての商賣でありお得意といふものは一人もなかつた。主家のお得意先で随分懇意にして頂いてゐる人達があつた。が、彼は主家のお得意を侵す事は何としても出来なかつた。それは大なる一つの罪惡であると信じ、さうすることが絶対の道徳だと信じてゐた。

「お客の大勢集つてゐるところ——、大きな銀行や會社が宜いだらう」
それから三井物産、三菱等の大會社、十五、山口等の大銀行、郵船、商船、山下等の大船會社へ繁々と行商の足を運んだ。だが、何處へ行つても膠なく斷られた。

「いらぬよ」

「今いそがしいから、この次だ」

品物を見て呉れるところもなかつた。然し、彼自身、それが當然だと思つた。名も所も知らぬ一行商人、それは信用されなかつたといつて抗議の持つて行き場もないのである。最初のうちは失望もしたが、彼の鞏固な意志は、

「信用されるまで無駄足を踏まう」

と、決心した。此熱心と、正直な商賣振が、今日は一人、明日は二人とお得意が増えて、追々と前途に光明が認められて来た。

船會社のうち山下汽船は何度行つても一品をも賣ることが出来なかつた。

「時間の都合がわるいのだらう」

と、或日一番最後に廻して夜分七時前後、社員の仕事の終る頃を見計らつて行商に出かけた。すると偶然にも最初に出て来て品物を見たのが山下社長であつた。社長は數點を買つた。内部の社員を呼んで「買はないか」と勧めた。社員も安心して買つた。斯うして一寸した彼の機轉が、其後山下汽船を立派なお得意にしてやつた。

大正五年以來の好況時代が彼に好運を恵んでお得意が次第に増え、品物もドンドン賣れた。

「當時一番大口の注文だつたのが、山下汽船がシンガポールに支店を開始する時、派遣の社員から一時に千圓以上の注文を受けたのでした。一行商人に對する注文としては、恐らく他にこんなのがありますまい。私は此時の嬉しさを未だに忘れません」

と、彼は思ひ出を語るのであつた。斯くて開業五年目にして主家の店をそつくり譲り受けて一躍神戸一流の洋品店となつた。カツラ洋品店主櫻井増尾氏がこの主人公である。

後から出て老舗並になつた男

東京銀座の半襟店に有名なえり國、えり治などといふ老舗がある。高級品を主として一ケ年少くとも五十萬本を消化するといふのであるから、その牢乎たる基礎や信用の程度も察せられる。

この老舗に近く半襟店を出し、忽ちにして其の名聲を博し、銀座の人氣店となつて成功したのが紅屋えり店である。前記二老舗が上流階級や花流界をお客としてゐるのに對し、紅屋は中流階級と其以下に目標を置いて、堂々として商陣を張つて今日の勝利を得たのである。

紅屋は先づ其の地の利に於て多分に成功の可能性をもつてゐたのである。然し、開業當初は思惑通りに行かなかつた。其の年の秋になつて見ると、思ひの外に冬物が澤山残つた。

「これを整理するのに特賣をやらなくちやなるまい」

と、主人は考へた。それを來年まで持越す事は金融の上から大なる苦痛であつたからである。恰度その折から問屋から、

「季末品を整理したいから特賣を引受けてくれないか」

といふ相談があつた。これは渡りに舟である。

「よろしい、引受けてやりませう。だが、かういふ際ですから相當の割引は承知して頂きたい」

と、問屋へは十分の譲歩をさせたことは言ふ迄もない。時は大正十一年の秋、世は不景氣の眞最中であつた。愈々五割引大特賣をやることを決心し、其第一準備として新聞廣告を掲載した。

それには五割引といふことを強調して三四日も續けて出したのである。次には新聞の折込廣告を三四日、チラシ廣告を三四日と連續して大特賣の宣傳をやつた。

遂に特賣の第一日が來た。如何に不景氣とは言へ、定價の五割引である、即ち半値である。此の大割引の効果は靦面、それに地の利を占めてゐるのと、早朝からお客は押寄せて、間口なら二間半の狭い店頭は人の黒山を築いてゐた。それが全部婦人客である。何と華やかな光景であつたことだらう。

「いや大成功でした。初日の賣上高は八千圓もありました」

と、主人はニコニコ顔である。

「どこでも特賣といふとホンの數日間といふのが相場であります、私どもでは二ヶ月餘の長期間も續けました。それは十月の末から十二月末までやつたのです。それで賣上高は毎日平均五千圓、大喧日は一萬圓近くありました」

主人は斯う話を續けた。

平均一日五千圓！一人の買上價格を平均一圓とすれば、一日五千人のお客が紅屋の店頭で、あれやこれやと嗜好みして半襟を買つたのである。それが奥様であり、お神さんであり、お嬢さんであり、娘さんであり、藝妓であり、雜妓でありである。その雜沓の光景を想像するに難くない。

「お蔭さまで二ヶ月間で三十萬圓を賣りあげました。半襟店としてのレコードでございます」
何と驚くべき大成功ではないか。それまではえり國や、えり治といふ老舗に押されて一顧たもされなかつた紅屋が、この大特賣以來、一躍老舗並に東京婦人の注目の的となつたのである。其

の後、幾度も大特賣をやつた。それが二回が一回よりも、三回が二回よりも大成功。遂に今日の紅屋半襟店の大をなしたのである。

賣りたがらぬ呼吸が賣る呼吸

京橋區岡崎町一丁目にある賣藥店仁成堂は「馬場の藥屋」で通つてゐる。これが東京市中一番客足の多い賣藥店で、一日二千人から三千人の客扱ひをするといふのだから、その繁昌振も想像するに難くはない。恐らく小賣藥店として日本一といつても差支はないだらう。

「明治十九年に開業しました。その頃は今日と違つて附近にポツポツ人家があるばかり、マア野中の一軒家でした。そこへ店を出したんですから、普通ではお客も来てくれないと思ひまして、二割儲けるところを一割だけはお客さまの足賃といふことにして安く賣りました。安く親切に。これが今の新しい言葉でいひますと、當時の私の店のモットーでありました」

主人は斯うした思ひ出を語つた。

「人通りが少いので晝間でも雨の日などは、近所によく追剥が出たくらゐるですから、今の若い方には一寸想像がつかますまい。當時私の店の直ぐ前は馬場でありましたので、これが「馬場の藥屋」の生れた譯なのです」

然し、如何に繁昌したと云つても、當時は主人と小僧二人、それは高の知れたものであつたらう。が、それ以來四十餘年、この長い年月に於ける「馬場の藥屋」の評判、

「安くて、親切だ」

と、いふのが、次第に客を吸ひ寄せて、一年は一年より多くなつて行つた。そして今日では、二十人の店員が食事する閑も忙しさうに立働いて、それでも手不足と見えて、お客は、自分の番が来るまでに可也の時間を待たねばならぬ位の繁昌を見せてゐる。

「今日では昔のやうに何でも安くといふ譯には行きません。其の頃印紙の貼られた賣藥は、組合で安く賣ることが出来ないことになつてゐませんでした。品物によつては定價よりも安く賣つてゐました。たとへば檢溫器とか、家庭用の醫療器具とかですね。それが定價が二圓五十錢にせよ、三圓にせよ、自分で此の位、二割なら二割、一割五分なら一割五分、つまり店の費用から割

出して適當の利益だと思ふ範圍内の値段で、二圓三十錢に或は二圓七十錢といふ工合に賣つて居ります」

此の差額が、主人から見ると儲け過ぎる分であり、お客の方から見ると、電車賃を使つても安いといふ譯になるのである。

「親切にすることには、組合では不可いとは云つてゐませんから、これは私たちが心一杯の親切で奉仕してをります。氷嚢一つ賣るにしましても必ず店で水を入れて試験した上に差上げます。それでお家でお使ひになつて悪かつたら、何度でもお取替いたします。手数のやうですが、この親切は今日の繁昌を招いた大なる原因でありまして、昔から一貫して店員にやかましく言ひつけてをります」

これは一度この薬屋で薬を買つたことのある人は誰でも感じてゐる所である。

「薬はお客本位に、お申出の薬を差上げます。然し、醫者に見せてゐるが少しも利かない。前にこの店の咳の薬が利いたから、とお求めになるやうな場合、私どもでは、なるべくお醫者さんの薬をもう少し飲んで御覽なさい、とお勧めして私の方の薬を差上げないやうにしてをります」

薬屋が薬を賣らない親切、これもお客に喜ばれた最大原因の一つである。

「マア、とりとめて繁昌になつた譯といふものもありません」と、主人は語るのであつたが、安く賣ることと、親切にすることの二つが、長い年月の中に、遂に「馬場の薬屋」を日本一の小賣薬屋さんとした譯である。

顧客の氣持を店則として成功

野本正一君は叔父の世話で遞信省の雇となつた。月給四圓、それは彼一人が獨立して生活するに十分であつた。時は明治二十五年野本氏十七歳の秋である。

彼野本氏は高田中學を中途にして上京したので、官吏としての將來のないことを知つてゐた。そこで早晩、役人の腰辨生活を止めて、他に目的を立てねばならぬと考へた。恰度その頃は、西洋文明が潮の寄するが如く日本に流れ込んだ時節で、従つてあれも舶來これも舶來と、西洋崇拜熱がクライマックスに達してゐた。この趨勢に注意を拂つた彼は、將來立身の第一歩は、英語を

十分に修めねばならぬと思つた。それより夜間の餘暇を利用して英語夜學校へ通學して、熱心に英語の勉強をしたのであつた。

五六年間も遞信省にゐたが、もとより官吏は一時の腰掛で、世話する人があつて浦賀船渠會社の書記となつた。月給は三十五圓、彼としては仲々の出世であつた。然し霸氣満々たる彼には、一生給料取として終らうなどの考へはなかつた。目的を獨立商人たらんことに求め、一日も早く獨立して青雲に乗じたいと、青雲の血は絶えず燃えさかつてゐた。

英語を勉強して西洋の事情に稍通じて來た彼には、當時の西洋文明が、何ごとも機械文明であるといふことを看破した。

「これからは機械の世の中だ」

彼は誰に言ふとなく呟いた。この結論が彼をして、

「俺は機械販賣店を開かう」

と、決心せしめた。それにしては第一に機械に關する知識が必要である。恰度、浦賀船渠にゐたのが幸、暇さへあれば各工場を廻つて多くの機械を次から次へと熱心に、視察し、研究し、

家へ歸つては機械技術に關する書籍を繙いて一心不亂に讀んだものだ。熱心は怖いもので、彼は數年ならずして一かどの機械學者となり技術者となつた。そして將來機械商として世に立つた。彼の準備が十分に出來たのである。只一つ、この上は機械商としての實地経験を積むことが必要だ。幸ひ當時機械商として有名な外國商館ホールン商會へ入ることが出來たので、ここで滿二年間、英會話と、機械の取引及び販賣に就いての實地練習を積んで、愈々獨立商人としての門出に上つたのである。

「愈々俺の天地をつくるのだ」

彼の瞳は希望の光に輝き、彼の肉體は抑へ難い霸氣で自ら勇躍するのであつた。そして間もなく三千圓の資本で開業したのである。それは明治三十六年、野本氏が二十八歳の時であつた。

「俺は機械商だが、機械其物を商品とは思はない。それは生産設備であり、生産能力である。それだけ機械の注文者に同情を持ち、良い機械を提供するのだ」

これが機械商としての野本氏の唯一の信條であつた。従つて機械の注文があつた際は、自分が注文者の立場になつて考慮し、そして相手に失望を與へない責任ある良品を供給すること

とに努めた。

「機械の注文なら碌々商會に限るよ。こつちに機械の知識がなくても、あすこの主人に一切委せさへすれば、安心して良品が手に入るよ」

これが世間の評判であつた。碌々商會とは謂ふ迄もなく野本君の經營する店の名稱である。店は日一日と繁昌する。今日では日本の碌々商會として、海外にまで廣く其の名を知られてゐるのである。

掛値賣りから正札賣への決心

新規に開業したトイン洋品店主戸井福三氏は、其の店の特色として掛値なしの商賣をやることに決心した。

場所は心齋橋筋の近くである。何か際立つた特色をもつて客を集めなかつたら、お客の多くは心齋橋筋へ吸取される。それは餘りに判りきつたことで、それだけ戸井氏の惱は大きかつたのである。

その頃の大阪の商賣は、いつこの店も掛値の商賣であつた。店では客の懷中を推量して値をつけた。

「これは幾何かね」

客が一足の靴下を手に取り上げて値を訊いた。主人は「買ふ客だ」と思ふと、一圓の品を、

「へい、一圓三十錢でございます」

と、いふ。客が買って歸つたあとで、

「これが商賣の秘訣だよ」

と、自慢したものであつた。

「この帽子は幾何かね」

主人はチラリと客の容姿を見た。「此奴値切るな」と思ふと、二圓の品を、

「へい、二圓五十錢でございます」

「高いな二圓に負ける」

「どう致しまして、元値でございます」

「ぢや一割引いて二圓二十錢に何うだい」

「折角でございますから、二圓三十錢にお負けいたします」

客の方では二十錢負けさせて喜んで買って歸つた。主人は、

「これが商賣の秘訣だよ」

と、自慢したものであつた。客の方でも「物は云ひ値で買ふものでない」と考へてゐた。然し？こんな商賣上の掛引は、客の購買心を著しく抑制さすもので、客は止むを得ない品の外はなるべく買はないやうに控へるといふことになる。これは自分が買ふ人の立場になつて考へると誰でも思ひ當るからである。

戸井氏は、豫てこの商習慣が時代から取残されるであらうと考へてゐた。商人として能率増進の上に、どうしても改革すべきことだと考へてゐた。それで自分が愈々開業すると同時に、斷然掛値賣りを廢して、

「掛値なしの正札賣」

を始めたのであつた。

「この靴下は？」

「ハイ一圓十錢でございます」

「丁度に負けて置き給へ」

「ハイ、まことにお氣の毒でございますが、私どもでは一切掛値を申上げませんので、これが一番お安く願つた値段でございます」

「さうかね」

と、不承無精に買つて行く紳士もあつた。

「何に負からない、そんなことがあるものか、一錢や二錢は何處の店だつて負けられるものだ。

ぢや、いらぬいや」

憤つて出て行く客もあつた。

「イトシンは變な店だ、一錢も負けない」

斯ういふ噂を聞いては幾度か主人の心が迷つた。然し、もう時代は、斯うした賣方を歡迎する

だらうといふ確い信念の下に、彼は依然として掛値なし商賣を續けた。

「イトシンは負けないが、品物が良くて安い」

こんな評判が間もなく立ち始めた。事實に於て良品を廉賣してゐたのである。従つて反動的に客が増えて来た。「負けない」といふだけで、品物は安い、客の取扱が氣持よい。店の裝飾が人目を惹く。店の氣持、主人の氣持がいつか客に判るやうになつて、イトシン洋品店の人氣は次第に沸上つて、遂に今日では大阪一流の洋品店として數へらるるに到つたのである。

金を借り集めるコツの大名

大正七八年の頃であつた。日本橋三越の向ふ側にズラリと並んだ食料品問屋、そのうちの山城屋といふ問屋の軒下に、毎日天秤棒を下して、季節季節の食料品を賣つてゐた老人があつた。大道商人に似合はず、不思議に良品を廉賣してゐるので、いつも店は大繁昌、女房と子供が手傳つてゐたがそれでも手不足で、お辨當を食べる閑もない位の忙しさであつた。

或年の秋、この老人が松茸を賣つた。品は京都の本場、それで市價より素敵に安價で問屋連さへ齒が立たない位であつた。相變らず賣れた、イヤ相變らずの程度を超えて、それこそ文字通り羽が生えて飛ぶかと思ふばかり、日々五百餘圓の賣上を見たのであつた。この大繁昌が忽ち軒を並べてゐる食料品問屋へ一大脅威を與へたので、遂に問屋側が結束して、山城屋へ件の老人立退方を迫つたので、老人氣の毒にも其處から姿を消して了つた。

それから四五年後、大正十三年の十二月も押詰つて銀座街頭に、忽然として一軒の食料品店が出現した。商品は乾物、野菜、漬物、煮豆、佃煮等々、普通の八百屋、魚屋、佃煮屋が日本一の銀座の電車交叉店近くに開業されたのである。店頭の看板に「食料品、魚がし甚兵衛山本商店」と書いてあつた。

此の店が、いかに多くの客足を惹いたかは恐らく、當時一度でも銀座へ行つたことのある人には其の記憶があることと思ふ。紳士、勤め人、奥様、令嬢、おかみさん等々、銀ブラ黨が、此店の前に足を止めぬものはなく、毎日少くも二千人から三千人のお客が何かを買つて行く、その賣上高も實に莫大なものであつたらう。

此の山本松之助氏こそ、曾ては山城屋の軒下で問屋連をして眼色なからしめた松茸賣であつたのである。銀座へ進出した年は還暦を過ぎて一年、六十二の高齡で三十人近くの若い男を使つての奮闘ぶりは、實に眼も覺めるばかり小氣味のよいものであつた。彼は、

「私が開業と決心して五萬圓の金を拵へました。それがあちらの友人から百圓、こちらから五十圓といふやうに借り集めたので、纏めるだけの骨折でも大變なことでした」

と、いつてゐる。

「私の金といつたら、電車賃だけです。眞箇無資本で着手したんですから、商賣も一つ當れば面白いですよ」

冒険といへば冒険かも知れないが、老人には勿論成算があつた。彼は斯ういつてゐる。

「商賣はそんなむづかしいものぢやありません。ラヂオを發明した人は偉い人だつたでせうが、其機械を造る職工は少し熟れさへすれば誰にでも出来るやうに、こんな商賣は一年もやつて、季節商品の關係さへ呑込めば譯はありません」

と。彼は十三歳の時から食料品店に奉公し東京へ來てから三十年間、矢張り食料品商として野

菜市場、果實市場、魚市場へ足繁く出入した關係上、市場間に多數の知己を持つてゐた。そして彼の正直と商賣上手とが、彼が銀座へ進出すると聞いて、その無數の知己が、

「俺も百圓、俺も五十圓」

といふ風に貸してくれたのである。

彼は又人使ひが上手である。店の使用人を決して雇人などと言はない。

「私の店に勉強してゐる人です」

と、いつてゐる。此の三拍子が揃つて山本商店は、個人商店として空前の繁昌を齎したのである。

十七圓の資本から稼ぎ出した男

銀座の夜店から元氣よく歸つて來た久七少年は、其の夜の賣上金を克明に計算して主人へ手渡した。

「久どん、ご苦勞ご苦勞、そこで今日の品が明晩の分で無くなるんだが、矢張り同じのを仕入れ

て来ていいかね」

主人は彼の勞を劬りながら、斯う相談するのであつた。

「さあ、賣れることは賣れるんですが、今夜一つゆつくり考へさせて下さい」

久七少年は、毎夜自分の隣へ出てゐるシャツ店のことを思ひ出した。店の男は、シャツは陸軍省の排下だと説明してゐた。品は相當のもので一枚二十錢均一といふ法外な安値、見る見る羽が生えて飛ぶやうに賣れるので、毎夜誰よりも早く店を閉めて歸るのであつた。

「俺の雜貨は一品一錢五厘均一、シャツは二十錢均一、それで俺の店より繁昌するんだから、儲けも随分大きいだらう」

少年は毎夜シャツ店の繁昌を羨んでゐた。そして此次には、何うかしてあのシャツを手に入れて賣つて見たいと思つてゐた。

「一體どこから仕入れて来るんだらう」

先づ、それから調べねばならぬと思つた。

「叔父さん、よく賣れますね。それではウンと儲かるでせう」

「お前の店も繁昌するぢやないか」

「賣れたつて知れたもんですよ。俺この次には貴方のシャツを賣りたいと思ふんですが、仕入先を教へて頂けませんか」

「エへへ、マアそのうちに分るよ」

相手の男は話題をそらして、仕入先を教へなかつた。

今主人から、品物が一段落だと聞いたので、彼は何うしても、シャツの仕入先を調べ出さうと決心した。

其の翌る夜、少年は店を閉めてからそつとシャツ商人の後をつけて、先づ彼の自宅を探り知つた。翌朝早くから其の附近で見張つてゐると、案の定、彼は大風呂敷を手に急ぎ足で出て來た。

少年は再び其の後をつけた。彼は鍛冶橋附近にある古着屋へ入つて、間もなくシャツを澤山仕入れて背負つて來るのを見た。

「占めた」

少年は躍上つて喜んだ。直ぐに其の店へ入つて交渉すると、既に彼の商人に一手販賣を約束し

であるのでと断られたを、色々頼んで漸つと一部を賣つて貰ふことにして、その夜から土地を變へてシャツの夜店を開いた。それが面白い程賣れた。儲けも一晩に四圓から五圓といふ大きさであつた。

久七少年は、斯くして十年間奮闘を續けた。そして一旦潰れた主家が、再び雜貨問屋として世に出づるに至つたので、初めて安堵の胸を撫でて獨立した。時に二十一歳。所持金僅に十七圓であつた。

「これで家も借りなくちやならぬ。商賣道具も買ひ、商品も仕入れなくちやならないんだが……」
 遺がの彼も哀れを感じるのであつた。が、それも暫時、何か思ひ當ることがあつたか、ハタと膝を叩いて呟いた。

「あるある、無資本でやるにはこれに限る」

當時は今日と違つて仲間同志間の取引が無かつた。慧眼なる彼は、そこに眼をつけて、同業者間の雜貨の才取をやる事にした。そこで先づ家を一圓八十錢で借入れた。小車を一臺三圓餘で、大風呂敷を一枚二圓で買入れて、愈才取業を始めたのであつた。

帝都屈指の荒物問屋、日本橋横山町の岩田久七氏は、斯くして今日の大成功を贏ち得たのであつた。

英語を狙つて成功した大商人

「君、これは僕のこしらへた凧だが、一つ買つてくれないか」

「何だ、莫迦に汚い凧だな。そんなもの誰が買ふもんかい」

「その代り安いんだよ。汚なくても良く揚りさへすりあいいんだらう」

「それぢや一つ買つてやるかな」

「俺も一つ買つてやらう」

富澤半四郎少年は、學校の運動場の一隅で同級の兒童の誰彼に、幾つかの凧を賣つて大喜びであつた。

「富澤君の家は凧屋かい」

「さうぢやないんだよ。このお金で僕は月謝を拂つたり、筆や紙を買ふんだよ」
 それ程、彼の家は貧乏であつた。然し、貧乏であればある程、富澤少年を發憤せしめて、彼は能く働いて、能く勉強した。

「いまに偉いもんになつて見せるぞ」

ともすれば彼の貧乏なのを侮りがちの少年ともに、彼の負けじ魂は、斯ういつて威張つてゐた。

小學校を卒業して地方の商家に小僧奉公したが、青年の容気はその頃から、東京の天地を夢に見てゐた。

「東京へ出なくては駄目だ」

後から押されるやうに、彼は上京した。時は明治二十二年、十九歳の春であつた。それから間もなく横濱の或家具店へ奉公した。

横濱は外人の多い土地である。従つて客にも外人が多かつた。彼等は日本人に比して割合に購買力が大きく、買ふとなると大抵高價な良品であつた。處が、此の店には外人相手のセールス

マンは一人もゐなかつた。單語の十や二十は、土地柄だけに知つてゐるものはゐたが、あとは手眞似の應答で、その爲に大切な客を逃がすことが多かつた。

「外人相手の商賣に英語を知らなくては、よい商が出来ないぞ」

彼は斯う、自分で自分の心を勵まして、それから主人の許をうけ、夜になつて附近の英學塾へ通つて一生懸命に勉強した。其頃有名な外人へボンが家具を買ひに来て、彼が熱心に英書を讀んでゐるのを感じて、優しい言葉をかけた。と、彼は、

「貴下の所へ英語を習ひに行きたいが、月謝が高いので——」

と、いふと、へボンは笑ひながら、

「君なら無月謝で教へてやらう。今夜からでもお出でなさい」

と、いつた。其の夜から彼は毎晩、へボンの所へ習ひに行つた。有名な外人から教はるといふ誇りと、外人相手の大商人とならうといふ意氣とで、彼は晝間は店務に忠實に働き、夜は遅くまで英語の勉強を續けた。その甲斐空しからず、彼の英會話は驚く程上達し、店へ買物に来る外人との應答は頗る巧みなもので、お蔭で店は急速の發展を來した。

それから間もなく、銀座の敷物輸入商陸屋から聘せられて其支配人となつた。當時陸屋は主人が巨額の負債を残して死んだ後で、謂はば其の整理の爲に彼を招いたのであつた。彼の堪能なる英語は、この店へ来て一段の用をなした。即ち仕入先なる外國商店との折衝を圓滿にし、一方その奮闘努力主義で、寢食を忘れて店運の挽回に努めたので、遂に五ヶ年目に十六萬圓の負債を償却し得るに至つたのである。

大正二年に陸屋の商號を其の儘繼承し、名實共に彼一個人の獨立經營の旗を揚げた。それ以來今日まで約二十年間、依然たる彼の奮闘努力主義は、遂に彼をして日本一の敷物輸入商たらしめたのである。

成功の事實を見せた快青年！

福どんは駒鼠のやうに陰日向なく働いた。新参者だけに、自分よりも三つも四つも年下の小僧さん達にまで追ひ廻され、朝の五時から夜の十時まで、人の二倍も働いた。

「主人の爲の奉公でなく、俺の爲の奉公だ」

かうした健氣な彼の覺悟は、働くこと其のことを一つの樂として、榮ある將來の獨立に向つて奮闘を續けた。

「獨立して何を商賣する？ 薄利でも需要の多いものを製造販賣するに限るかな」

彼は忙しいうちにも時々色んなイリュージョンを頭腦の中に描いて自問自答するのであつた。すると全身の血が一時にカツと沸立つやうに、後から押されるやうな氣持ちになつて仕事に精を出すのであつた。

其頃、彼の奉公先なる井筒油店へ出入する商人に、ランプの芯を販賣する男があつた。元相當の資産家であつたが、相場をやつてスツテンテンとなり、目が覺めて始めたのが此の商賣であつた。店の小僧たちは、

「あんな利の細い商賣ぢや駄目だ」

と、鼻で笑つてゐた。然し、そのランプ芯賣屋が、四五年のうちに押しも押されぬ立派な問屋になつた。福どんの、

「薄利でも需要の多い商賣」

と、漠然とした將來に對する希望が、茲に判然と成功の事實を見せてくれたので、彼は、

「これだこれだ」

と、思はず快哉を叫んだのであつた。然し、一體どんな品を製造販賣したらよいのか。そこま
で突き詰めると、「これなら吃度備かる」といふ考が容易に浮ばなかつた。獨立自營の身となつ
てからも、これが一つの大きな悩みであつた。

明治二十六年米國シカゴ市に開かれた萬國大博覽會に、非常に好評を博した齒磨粉があつた。
その齒磨粉を持つて歸つて、これを製造販賣しないかと勧めたものがあつた。

「これだこれだ」

福どんは膝を打つて喜んだ。小僧時代から小店を開くやうになつた今日までの數年間、一日と
して頭腦から離れなかつた幻影、否理想の實現される日が來たのである。

「薄利でも需要の多い品」

その品が、今偶然にも自分の眼の前へ突きつけられたのである。齒磨粉なら眞の大衆的需要品

である。品質さへ優良であつたら、日本は愚か、外國へまで輸出して四時需要の絶えない品であ
る。彼の若い胸は言ふべからざる感激に躍つた。と、ランプ芯賣屋の華々しい成功の映畫が、自
分の眼の前へ大寫しになつて現れた。

「俺もこれで成功して見せるぞッ」

福どんは誰に言ふとなく、力のある聲で斯う獨語つた。それより彼は苦心研究の末に、遂に象
印齒磨を製造販賣するに至つたのである。

「シカゴ土産象印齒磨」

これが當時の象印齒磨の標語であつた。舶來品の尊重された當時、加ふるに品質の良かつたの
と、更に當時東西屋といふ樂隊を雇つて賣出しの日に店頭で賑々しく吹奏して貰つたの等々で、
其の評判は大したもの、店頭は顧客の黒山、押すな押すな雜踏であつた。一方彼は朝早く出
でては顧客を訪問して注文を取り、入つては細君を相手に齒磨の製造に従事して、文字通り不眠
不休で働き通したのであつた。

「點滴岩をも穿つ」——彼の不斷の努力は怖ろしいものであつた。僅か三年の後には、象印齒磨

の名は全國同業者間に知られ、需要は日に月に増大して約一萬圓の利益を計上したのである。其れを基礎として香水石鹼等次々に商品を開張して行つた」

福どん——此人こそ今の資本金百萬圓、井筒堂主安藤福太郎氏の先代その人である。

米國から仕事を探して來た男

森永太一少年は蕪蕪の行商をやつた。伊萬里焼の行商もやつた。毎日十五貫も二十貫もある重い荷を負うて、町から里へと賣つて廻つたが、食ふだけの利益さへなかつた。彼は日本では到底うだつがあらないと、遂にアメリカへ渡航した。

然し、そこにはボロい金儲けが彼を待つてゐなかつた。血洗ひをやつたり、窓硝子拭をやつたり、或は其日々の勞働に雇はれて、不安と焦燥の日を送つてゐた。折角アメリカまで命がけにやつて來て、宜い仕事が無いと言つて何うして日本へ歸られよう。

「どうしても手に職を覚えなくては駄目だ」

浮浪の生活の苦しみ、彼をしてこんな決心を起さしめた。アメリカへ來て見ると何もかも日本の物と異つてゐた。殊に菓子類のかけ離れた進歩に興味を惹かれた。

「菓子の製造を覚えて歸らう」

彼は傳手を求めて大きな菓子製造店へ奉公した。當時日本の國際的地位が非常に低かつたので米人の職人の多くは日本といふ國の存在を知らなかつた。日清戦役が突發した時に彼等は、「日本は支那に對して獨立戦争でもするのか」

と、彼森永氏に訊ねた位であつた。それだけ米人の職人は、日本人なる彼を侮蔑し、彼を虐待した。従つて勞働時間も長く、一晝夜十六時間以上も働くべく餘儀なくされた。それをしも彼は忍従して柔順に、そして眞面目に働いたのであつた。

「何しろ眞劍だつたね。眞箇自分の運命の岐路だと思つて滅茶苦茶に働いたよ。睡眠時間だつて三時間ぐらゐ、いつも氣が張り詰めて早く菓子の製造を覚えようと、そればかりが苦しい中の樂みだつた」

これは往年を追想しての、彼の偽らざる感想である。

「日本へ歸つて菓子製造を始めましたが、資本が少いので最初は随分苦しみました。朝は暗いうちから菓子の製造に従事し、夜になつてお得意先へ配達して來るんですが、歸りは毎夜、夜中になり、一日の睡眠時間が僅に三時間位でした。然し、自分の事業だと思ふと、米國の三時間睡眠に比べて餘程樂でした。否、却て愉快でしたよ」

これも追憶談の一片である。

「死んだ森村男爵のお話だつたと思ひます。何でも日本に出來ないものを、日本に出來るやうにして日本を富ましめなくてはならない——と、私は當時のお話を伺つて非常に共鳴しました。これが益々私の、菓子製造人としての信念を強めました。そして微力ながら日本に出來ないやうな菓子を製造したいと一生懸命になりました」

森永氏は斯く追憶談を續けて、

「今でも金は残りませんよ」

と、笑つた。此の森永氏の菓子店が今日の森永製菓株式會社で、主人の森永氏は今日の社長森永太一氏その人である。

「私は今日でも菓子製造を私の天職だと信じてゐます。そして天職の爲に奮闘努力することを、大なる誇りとし、樂とも感じてゐます。此の上とも歐米の製品に負けない良品を製造して、聊か日本の國家に奉仕したいといふのが私の理想です」

この抱負を以て菓子を製造するのであるから、素晴らしい立派な菓子が製造される、そして海外まで輸出される。かくて森永製菓會社は旭日昇天の勢を以て發展しつつあるのである。

金の篇

儲けるコツは目のつけ所一つ

石油界の成功者小倉常吉氏は、十四年間の小僧生活を満足に勤めあげて、二十五歳の時獨立して小かなる石油店を開いた。

「そのとき手許にあつた金は僅か三百圓でした。そのうち百圓を敷金に、五十圓で世帯道具を買ひ、残りの百五十圓が資本の全部で随分心細いものでした」

小倉氏は斯う云つてゐる。

性來頭腦が緻密で、研究心に富み、商才の豊かであつた彼は、その取引の上にも他人の氣のつかないところを考へて、今まで誰にも捨てられてゐた利益を集めて大をなしたのである。

當時大阪方面より仕入れる種油の容器は樽であつた。彼はそれを石油の空罐に入れることに先鞭をつけたのである。そして自ら仕入地へ行つて石油の空罐を買集め、それを油問屋へ持つて行つて詰めさせた。

「貧弱だねえ、東京の商人に似合ねえ」

と、問屋のものが蔭口を利いたものだ。そして初めて空罐に詰めた種油が、東京の店へ着いた時、店のものも、

「貧弱だなア」

と、呆れたものである。と、彼は、

「見かけが貧弱でも中味は變らないよ。いつもの油樽は一箇六十五錢だ、それが空樽となつて拂へば僅か二十錢だよ、それで差引き四十五錢の損がある。石油の空罐は大阪でも一箇三十錢だ。斯うして二度のお勤めをして賣つても三十錢だ。して見ると、この空罐に詰めて仕入れただけで一罐に就いて四十五錢儲かつてゐることになる」

「成る程さうですね」

彼の説明を聞いて店員たちは、互に顔を見合せて首肯したのであつた。

「それから、新しい油樽に入れて運べば、大阪から東京へ着くまでに、一箇について約五合の油が木樽の中に吸はれて了ふんだよ。石油の空罐ぢや此の減りが儲かる」

店員たちは再びペコンと頭を下げた。

「まだある。船積にする場合、油樽は一箇四斗入で六才の容積を占める。が、石油罐入は一箇二斗入で二才の容積だ。だから油樽一箇即ち四斗を運ぶ運賃で、石油罐ならば三箇即ち六斗を運ぶことが出来るんだ」

「……………」

「何うだ、解つたかな」

店員たちは三度頭を揃へて下げた。彼は尙ほ續けた。

「この儲けの半分だけ、品を安く賣つたら、賣れること請合ぢやないか」

論より證據、彼の店の種油はよく賣れた。その安値は他の油店で到底眞似ることの出来ないものであつた。彼は此のコツを石油にも用ひた。當時越後から仕入れる石油は、運搬設備の不備で

千箱に對する三百箱の漏れは免れ難いものとされてあつた。一般商人は、

「その損害をあと七百箱に負んぶさせれば元々なんだ」

と、したり顔であつた。彼は此損害を除く爲に、自ら積下しの現場に臨んで人夫を監督した。

「オイ、もつと丁寧にするんだぞ。荷物だと思ふとぞんざいになるが、そりあお前みんな小判の耳だよ。オツと、油が漏つてゐるよ、そこんところを直しな、十錢銀貨や五十錢銀貨を磨して歩

いちや冥利がつさるよ」

斯くして彼は三割の損を、僅に千箱に就いて一二箱の漏れ損迄に防止することが出来た。

「それだけ安く賣ることが出来ましたよ」

萬事が此の頭腦の働と、熱心と、努力で、彼は今日の大なる地歩を築いたのである。

退屈に氣がついて身を躲す

唐物屋辻屋の小僧さんの金どんは、店頭に座つてボンヤリと向う側の時計屋を眺めてゐた。時

計屋の店頭には店員が二三人、臺の上にコツコツと時計の修繕をしてゐた。

それは今から約六十年前、金どんと呼ばれた小僧さんは、今日の時計王、服部金太郎氏の幼な姿である。

唐物屋の店は割合に閑であつた。其の閑な時には、店員は手を束ねて爲す事も無く退屈してゐるのであつた。金どんも其の退屈をしてゐる一人である。

「時計屋の奴あ、さう退屈でないだらう」

不圖、こんなことを考へた。と、空想の鳥が次から次へと大きい翼を伸ばして、金どんの頭の中を駆け廻つた。

「時計屋は宜い商賣だなア。店で時計を賣る。お客の無い時には毀れた時計の修繕をする。其の直し賃だけでも暮しが立つだらう」

斯う考へると、自分たちが、宛度蜘蛛が網を張つて餌のかかるのを待つてゐるやうに、する事も無くお客を待つてゐる時間が惜しいと思つた。

「時計屋は宜い商賣だ、あれは兩刀使のやうなもので手堅い商賣だ。無資本でも出来る商賣だ」

と、考へ續けた時、金どんの空想はコツンと一つの暗礁にブツかつた。

「唐物屋でも初めから相當の資本が要るが、俺の親爺が貧乏で資本は出せないとすると先の見込がない。こりあ一層のこと時計屋にならう」

これが明治七年、金どん十六歳の時であつた。彼は直に傳手を求めて或時計屋に奉公することとなつた。然し、當時は時計の需要も極めて稀な時代で、時計の修繕などは一種の祕傳でもあるかやうに、容易に奉公人にも教へなかつたものであつた。

「金どん、時計の直しが習ひたくば、最初の一年、二年間は子守をすることだ」

主人は斯ういつて毎日子守をさせるのであつた。彼は、これも將來の出世の爲めだと覺悟して朝から晩まで忠實に子守をした。そして子守をしながら時計の直し方を教へて貰つた。熱心と努力が彼の腕前をすんすん上達せしめて行つた。かくて四年間、みつちり時計の直し方を仕込まれて、彼は優秀な修繕工として許されるやうになつた。

主人が失敗して閉店したので、彼は父の家に歸り、獨りでコツコツと時計の修繕を業とし、夜になると夜店から破毀れた時計を買つて來て、それを修繕して相當の値段に賣つて其の利益を溜

めて將來に備へた。

「明治十四年に初めて小さな時計店を開きました。資本金は百五十圓でしたが、それも直して儲けて溜めた金ですから、謂はば無資本で始めたと同様です」

これは後年の服部氏の思出話である。

其頃横濱の居留地にアイザック・コロンといふ時計輸入商があつた。彼は此の外商から時計を借り、他の小賣店に卸す仲買をもやつてゐた。他の仲買人の多くは勘定の仕拂が悪く、外商も困りきつてゐた中に、彼だけは一回として違約したことがなかつた。

「日本人としては珍しい堅い男だ」

と、商館の主人はすつかり彼を信用した。そして彼だけにはドシドシと貸出すやうになつた。かくて明治二十五年には十萬圓の資産が出来、獨力で精工舎を創設してボンボン時計の製造を始め、遂に日本一の時計商となつた。

五十三歳から奮起して大成功

「麦酒王馬越恭平氏は十八歳の時、大阪の親戚に當る金持の商人播磨屋仁兵衛の養子に貰はれて行つた。

儒者の子で、親達も彼を儒者にしようとして育ててゐた。然し幼い頃より家計の苦しいのを知り、つくづく貧乏の苦い味を嘗め盡してゐた彼は、

「俺は儒者はいやだ。商人になつてウンと金を儲けたい」

と、親達を困らせてゐた。それだけに頗る奮闘的で機才に富み、天性商人としての素質を持つてゐた。それが播磨屋の眼鏡に適つて養子となつたのである。そして二年目に播磨屋夫婦は樂隠居して、商賣は一切養子に任せきりにした。それほど彼は商賣に熱心で、手堅く眞摯であつたのである。

「播磨屋はいい養子を貰ひあてた」

と、近所で評判し合つた。播磨屋は自分の眼に曇のなかつたことを窃かに自慢した。彼には幸福の年は流れて三十歳となつた。長男の徳太郎は五歳になつて可愛盛りとなつた。其の頃、東京で成功してゐた長兄から頻りに來遊を促して來たので、彼は有るに任せて千圓といふ大金を懐に、遙々東京見物に出かけたのであつた。

長兄は汽船問屋をしてゐた。非常に進歩主義の人で、もう其の頃丁髷を斬つて頭髪を綺麗に真中から分けてゐた。外出にはいつも洋服であつた。山高帽子を冠り、ステツキを振りながら、靴音高く出て行く姿は、保守主義の大坂商人である彼の瞳に、それは非常に珍しいものであつた。そこで初めて西洋料理も食べた。

「兄さん、こりあ美味い料理ですね。材料は何です？」

「お前未だ食つたことがないのか。そりあ牛肉だ、牛の肉だよ」

「これは？」

「それは豚肉だ」

彼には無氣味を通り越して太半の美味であつた。時折長兄から聞かされる話は、年少漢學塾で

學んだ彼には、總てが驚異であつた。斯くして、僅日の滞在であつたが、彼の思想に一大變化を與へた。そして大阪へ歸つた時には全く別人になつてゐた。

彼は丁髷を斬つてゐた。盛んに牛肉を食べた。豚肉も食べた。文明開化を説いた。その新しがりやが、頑固一徹な佛教信者であつた彼の養父母の怒に觸れて遂に離縁となり、裸一貫で長男を伴れて生家へ歸つたのである。それが三十歳の時であつた。

「何もかも新規時直した」

間もなく上京して井上侯の創立した先收會社へ、四圓五十錢の月給を貰つて入ることが出来た。此會社が三井家に譲渡されて三井物産となつてからも、彼は引き続きそこに勤めた。彼の商才と努力とは次第に重用され幹部に拔擢されて勤続二十年、三井物産の今日の基礎を作つた功勞者の一人であつたが、三井を退いた時の退職手當が僅に一萬五千圓であつた。

「少くも二十萬圓はくれてよからうと思つたのに、餘りの仕打ちで、三井の主人の顔へ叩きつけてやらうかと思つたが我慢をしたよ」

とは、後日人に向つて語るところであつた。

「その一萬五千圓も、郷里の岡山縣で、大養氏を向うに廻して代議士の候補に立ち、結果が散々の敗亡で又元の無一物になつたよ」

と、今も其の頃の思出話をすることもある。

「また新規詩直した」

と、彼は再び裸一貫で金儲けに取りかかつたのである。時に五十三歳。今日の彼の地位と巨萬の富とは、それ以後の奮闘努力の産んだものである。

字引の中から出世の夢を探す

お正月も近づいた師走の寒い夜であつた。未だ少年の頃の大川平三郎氏は、枕もとにした何かの物音にフト眼を覺した。

睡を轉すると、そこには薄暗い行燈の前で彼の母が一生懸命に、自分達兄弟の下駄の鼻緒を拵へてゐたのであつた。この頃、彼の家は貧のドン底にゐた。新しい鼻緒のついた下駄も買つてや

ることの出来ない彼の母親は、せめて鼻緒だけでも新しいのを造つてやりたいものと、忙しい一日の仕事を終つたあとで、かくは夜遅く迄かかつて拵へてゐたのであつた。

彼は急に眼頭の熱くなるのを覺えた。と、やがて湯のやうな涙が、兩の眼から止めどなく滲み出るのであつた。幼いながらも彼は、母性愛の有難味を身に沁みて感じたのであつた。そして、

「どうか一日も早く一人前の人間になつて、兩親に安心させねばならぬ」

と、心に誓つたのであつた。それから一層學問を勵んだ。そして間もなく上京し、澁澤子爵家の玄關番となつて勉強した。當時澁澤子爵は役人をしてゐたので、木戸孝允や西郷隆盛や、三條實美などのお歴々も來たことがあり、それを一々彼大川氏が取次に出たもので、

「俺も早くこんな偉いお役人になりたい」

と、考へてゐたもので、その刺戟が若い彼の向上心を鞭打つて一心不乱に勉強した。獨逸語もやつた、英語もやつた。それが皆獨學で、それで立派なものになつたのであつた。

大川家は澁澤家と親類であつた。彼がまだ玄關番をしてゐた頃、彼の母は澁澤家へ金を借りに來たことがあつた。